

## 主な事例に見る里地里山の現状と課題

本資料では、里地里山の保全・活用に向けて特徴的な取組が行われている 4 地区について、試行的に現状と課題の整理を行った。

今後は、本資料で提示する 4 事例に加えて、アンケート調査により収集された取組事例を母集団としてさらに特徴的な事例を抽出し、詳細な事例調査・分析を行うこととする。また、事例調査・分析の観点や項目については、今回の検討会で頂いた御意見を踏まえて見直し・改良を行うこととする。

表 4 地区の概要

地区名	自然・社会条件	事例の内容と特徴
<b>■No. 1</b> 神奈川県秦野市 南部 (p.3～)	≪自然条件：二次林と農地が隣接≫ ・樹林地と農地が隣接 ・樹林地は落葉広葉樹林 ・農地は主に畑、一部水田（谷戸） ≪社会条件：郊外のベッドタウン≫ ・ベッドタウンとして戦後に人口増加 ・農林業は衰退傾向	≪事例の内容≫ ・行政（秦野市）による、市民協働による里山管理の促進・支援 ≪特徴≫ ・地域に残る旧住民の技術・経験を核として、それに新住民のマンパワーを組み合わせさせた新たな協働の体制を構築することにより、里山管理を推進
<b>■No. 2</b> 高知県四万十町 四万十川中流 (p.13～)	≪自然条件：河川を軸とした人工林・農地≫ ・河川を軸に集落・農地が立地、周囲に山林 ・樹林地は主にヒノキ・スギ人工林 ・農地は小規模な畑・水田・果樹園が混在 ≪社会条件：中山間地≫ ・かつて林業が盛んであった中山間地 ・人口減少・高齢化が進行	≪事例の内容≫ ・民間企業（(株) 四万十ドラマ）による、一次産業振興による持続的な地域づくり活動 ≪特徴≫ ・自然に負担をかけないことを理念として、古くから培われてきた農林漁業の資源・人材の発掘による「天然物のモノづくり」を行い、地域の生業を再生
<b>■No. 3</b> 石川県輪島市 町野町金蔵地区 (p.23～)	≪自然条件：典型的な里山の景観≫ ・棚田が広がり、溜め池・民家が点在 ・石川県版 RDB 種を含め、里地里山に典型的な生物が生育・生息 ≪社会条件：限界集落≫ ・お寺を中心として古くから千石在所として栄えてきた中山間地の集落 ・現在の集落も室町期の趣きを残す ・戦後から現在にかけて人口減少・高齢化が進行	≪事例の内容≫ ・「金蔵学校」による、やすらぎの里の整備、農産物のブランド化 他 ・里山駐村研究員制度等を介した民学連携 ≪特徴≫ ・地元住民が中心となり、集落を支えてきた伝統的な仕組を基に活動を実施 ・歴史・文化・伝説などを活用した集落の整備や特産品創出等を行い外部との交流を図る
<b>■No. 4</b> 京都府福知山市 毛原地区 (p.35～)	≪自然条件：棚田とそれを取り囲む樹林地≫ ・急傾斜地に棚田が形成され、周囲を樹林地が取り囲む ・樹林地は多様な樹種で構成、近年はモウソウチク林が増加 ・低木層にはミツバツツジが多数自生 ≪社会条件：限界集落≫ ・棚田で生計を立ててきた伝統的小規模集落 ・集落の戸数が 26 戸から 13 戸まで減少し、高齢化が進行	≪事例の内容≫ ・棚田体験ツアー・棚田オーナー制度等による都市住民との交流 ・企業の協働による森林整備 ≪特徴≫ ・かつては「余所者」を受け入れない土地柄であったが、取り組みを積み重ねる中で交流が進み、都市出身者や企業などの「新たな担い手確保」を実現

表 各事例の目的・取組主体・立地条件

凡例 (◎：関係が深い項目 ○：関係がある項目 ・：過去に関係した項目)

		取組主体			
		事例1 秦野市南部	事例2 四万十河中流	事例3 輪島市金蔵地区	事例4 福知山市毛原地区
目的	①里地里山の持続的な管理・利用		◎	○	
	農林業を通じた伝統的利用(管理) バイオマスなど新たな資源利用		◎		
	②環境教育や自然体験、エコツアーリズムの場としての利用	○	◎		
	③野生動植物や生息地の保全・再生	○			
	④地域の良好な景観の保全・修復	◎		○	◎
⑤伝統的知恵や技術の継承			◎	○	
取組主体	①地域コミュニティ	○	◎	◎	◎
	②市民・NPO・企業等地元外	○	○	○	◎
	③行政支援施策の活用	◎	・	・	○
	④多様な主体による参加・連携	◎			
立地条件	都市近郊地域				
	都市周辺地域	◎			
	平地・盆地・丘陵 山地				
	中山間地			◎	◎
奥山周縁地域		◎			

# 事例 No.1 秦野市南部

## 1. モデル地域の概況（基礎データ）

範囲	<ul style="list-style-type: none"> <li>・秦野市域のうち「里山林」（秦野市施策における「生活活用林ゾーン」）</li> <li>※秦野市の森林・林業関連施策では、市域を植生及び標高に応じて次頁の図に示した区分が行われている。「奥山林」及び「山地林」については、主に神奈川県の水源保全施策により対応が図られていることから、ここでは、秦野市及び市民による取組が行われている里山林（生活活用林ゾーン）を対象とする。</li> </ul>
立地条件	<p><b>★ 東京・横浜からの通勤圏に位置する</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・東京都心部から直線距離で約 60km、小田急電鉄秦野駅まで鉄道で約 1 時間半</li> <li>・横浜市中心部から直線距離で約 40km、小田急電鉄秦野駅まで鉄道で約 1 時間</li> </ul>
自然条件	<p>土地利用・植生</p> <p><b>★ 盆地周縁部に二次林と農地が隣接する里地里山の景観が色濃く残されている</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・市域の 53%（約 5452ha）を山林が占め、そのうち約 20%（1,130ha）が里山林である（本モデル地域の対象範囲）。</li> <li>・モデル地域のうち、盆地の平坦部は概ね市街化区域であり、鉄道駅を中心に商業・業務地、その外側を住宅地が取り囲み、樹林地や農地はほとんど残されていない。</li> <li>・盆地周縁部及び山地は市街化調整区域であり。二次林と農地が隣接する里地里山の景観が色濃く残されている。</li> </ul>
	<p>地形・水系</p> <p><b>★ 県内唯一の盆地であり、地形・地質が良質の地下水を育む</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・盆地の大部分は扇状地であり、河川水は伏流することが多いが、渋沢丘陵や弘法山の山麓部は湧水に恵まれており、「秦野盆地湧水群」として「全国名水百選」の 1 つに選ばれている。</li> <li>・秦野盆地は「天然の水がめ」であり、地下水が豊富である。市の水道供給量のうち、約 7 割が市内の地下水である。</li> <li>・市内各地に良質の湧水が分布し「秦野盆地湧水群」として名水百選に選ばれている。</li> </ul>
	<p>特徴的な動植物の生息・生育状況</p> <p><b>★ 水辺には里地里山に特有の動植物が生息・生育する</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・湧水及びこれを水源とする水田には、ゲンジボタル、ヘイケボタル、アズマヒキガエル、ホトケドジョウ、メダカなどが生息する。</li> </ul>
社会条件	<p>歴史</p> <p><b>★ かつては国内有数のたばこ産地、戦後はベッドタウンとして宅地化が進展した</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・江戸時代初期には葉たばこの栽培が広まり、「全国三大たばこ産地」の一つに数えられるまでに成長し、江戸時代から近代にかけて秦野の経済を支えた。</li> <li>・たばこ栽培は第二次世界大戦後に衰退し、昭和 59 年に市内で完全に廃業された。現在は、恒例行事である「秦野たばこ祭」などに面影を留めるのみとなっている。</li> <li>・たばこ産業の衰退と入れ替わりに、第二次世界大戦後には小田急電鉄沿線のベッドタウンとして宅地化が進展。</li> </ul>
	<p>人口</p> <p><b>★ 戦後に急激に人口が増加し、新住民が多数居住する</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・前述のように戦後に急激に人口が増加し、昭和 30 年から約 50 年間で約 3 倍、平成 17 年現在で約 17 万人を数えるまでになっている。ただし、近年は人口増加がやや鈍化する傾向にある。</li> <li>・高齢化率（65 才以上の人口比率）が上昇しつつあるものの、平成 17 年度現在で約 12%と現時点ではそれほど問題となっていない。</li> </ul>
	<p>産業（特に農林業）</p> <p><b>★ 農林業が衰退し担い手の高齢化が進んでいる</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・第一次産業従業者の数及び比率が減少の一途をたどっている。</li> <li>・農業者の高齢化が著しく、基幹的農業従事者のうち 65 才以上が約 53%を占めている。</li> </ul>



図 秦野市の位置（出典：秦野市都市マスタープラン）

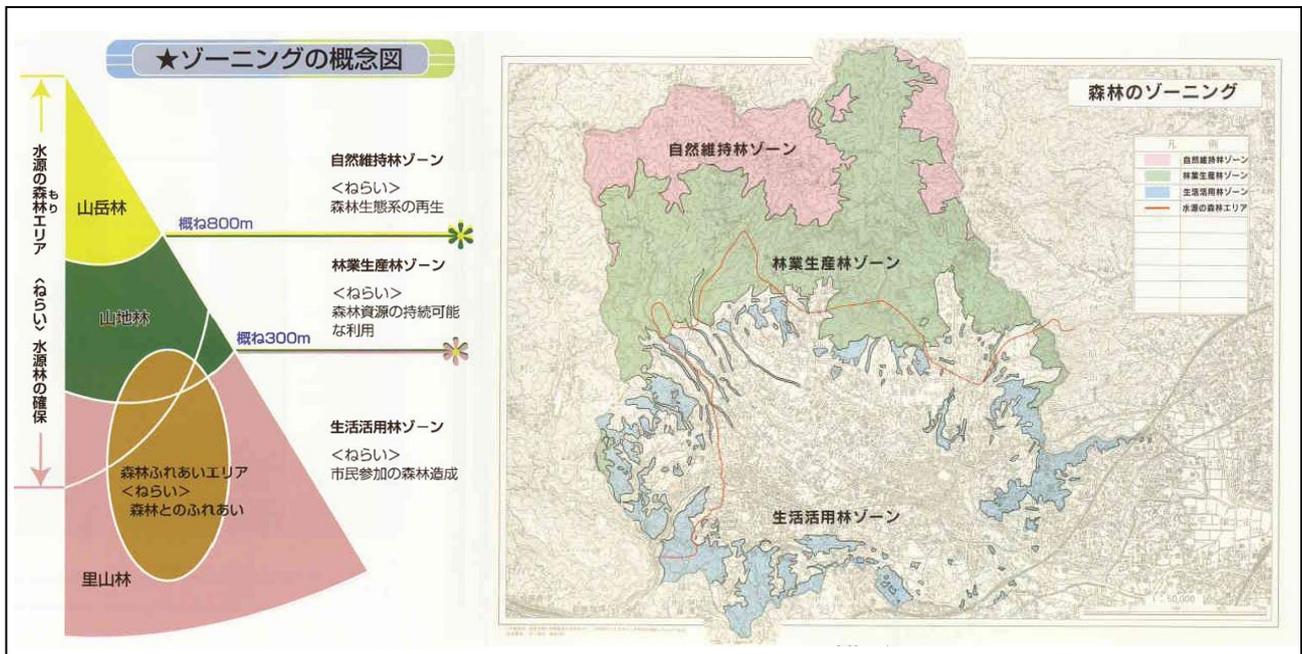


図 秦野市における森林のゾーニング（出典：秦野森林づくりマスタープラン）

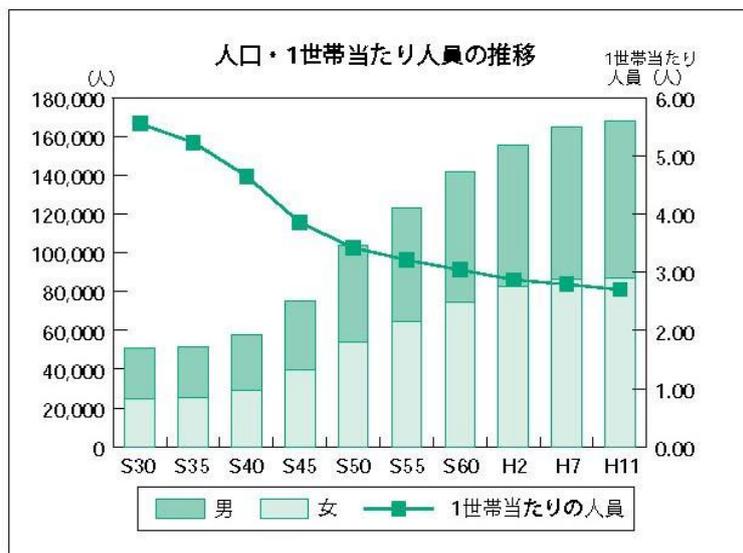


図 秦野市の人口動向（出典：秦野市都市マスタープラン）

## 2. かつての里地里山の姿

### ★ たばこ産業により形成された里地里山の物質循環

- ・水はけのよい扇状地が広がる盆地の中部・北部では、たばこ栽培により農地と二次林の物質循環が形成されていた。
- ・秦野で栽培されていた「黄色種」の葉たばこは、収穫の後に燃料乾燥を行って葉が黄色い状態で乾固させる必要がある。そのため、江戸時代から戦前までは、燃料として里山の薪が大量に利用された（戦後は重油バーナーが普及）。
- ・煙草耕作は多量の肥料が必要であり、上記の薪の燃焼で得られた灰が肥料として広く用いられていた。
- ・里山で「くずかき」（落ち葉かき）が行われ、これを材料として腐葉土が作られ親床や苗床が作られていた。

### ★ 南部の山麓で見られた水田・二次林の物質循環

- ・湧水が豊富な渋沢丘陵や弘法山の山麓では、水田耕作及びこれと一体的な二次林の利用が行われていた。
- ・上記の営みを通じて、水辺の動植物の生息・生育に適した環境が形成・維持されていた。

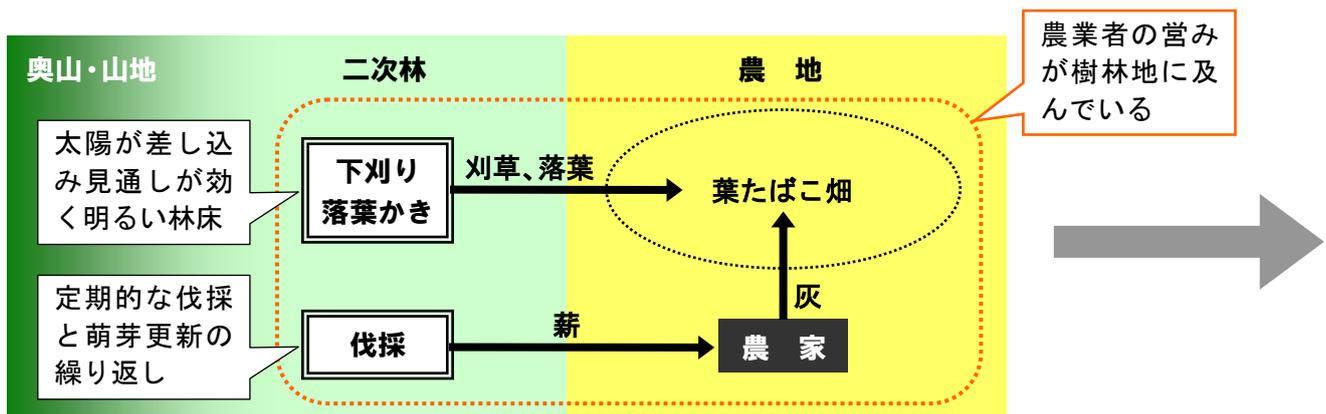


図 たばこ栽培により形成された物質循環のイメージ

### 3. 里地里山の現状（問題点）

#### ★ 担い手の減少と物質循環・技術の喪失

- ・かつて秦野で盛んであり、二次林から燃料や肥料を得ていた「たばこ産業」の廃業により、二次林管理の担い手が減少している。
- ・また、現存する農家もエネルギー・肥料を地域外に依存するようになったため、樹林地と農地のつながりが失われ、地域内の物質循環が喪失している。
- ・かつて里地・里山を利用していた農業者は依然として地域に存在するが、高齢化や農業離れが進んでおり、このままでは里山管理技術が失われてしまう恐れがある。

#### ★ 管理の動機の消滅

- ・里地里山の樹林地は、かつては葉たばこ栽培と結びついた「生業の場」であり、林産物や生活物資を供給していたが、農林業との関係が途絶えてしまった現在では経済活動の場ではなくなり、管理の動機が失われている。

#### ★ 二次林の管理悪化による実害の発生

- ・二次林の管理が行き届かない、林床に低木や草本が繁茂して暗くなってしまったため、本来は人里離れた地域に生息していたイノシシやシカ等が身を隠しやすくなり、人里に出没して農地を荒らす等の被害が発生している。また、イノシシやシカに付着してヤマビルが生息範囲を広げ、市民に被害が発生している。
- ・被害は顕在化していないものの、二次林の環境が悪化すれば保水力の低下につながる恐れがあり、水源の7割を地下水に依存している秦野市民の飲料水に影響する恐れがある。

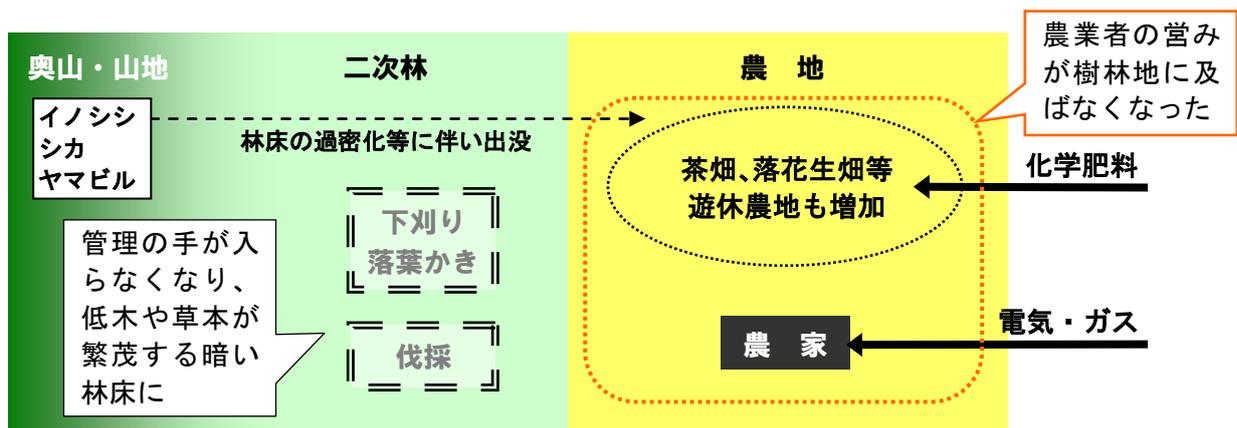


図 たばこ栽培により形成された物質循環のイメージ

## 4. モデル地域における里地里山の保全・活用の取組

### ～協働による里山管理を支える市行政の動き～

#### 1) 取組の実施主体・体制

秦野市の里山の多くは私有地であることから、里地里山の保全・活用の取組は、土地所有者による自主的な管理と、その他住民による作業への参加を基本としている。

地方公共団体である秦野市は、上記を支援・促進する立場にあるが、その中で下記のような共通基盤的な施策事業を積極的に展開しており、地域における自主的な取組を広く支える存在となっている。

以下では、市内の里地里山管理を促進・支援するための市の施策・事業について記述する。

#### 《市民による里地里山管理を促進・支援するための市の施策・事業のポイント》

##### ★ 旧住民を核としつつ、新住民を巻き込んだ協働による新たな担い手システムの構築

- ・「かつての里山の姿の再生」を目標としつつも、それを支える人材については、伝統的な里山管理技術を有する「旧住民」を核としつつ、そこにマンパワーとして地域に多く居住する「新住民」を結びつけることにより、質・量ともに充実した新たな担い手システムの構築を図っている。

##### ★ 森林の公益的機能を根拠とした公的支援施策・事業の実施

- ・かつての農業生産という「私益」に代わる里地里山の管理の動機付けとして、公的主体である市が、水源保全等の「公益的機能」と位置付けている。
- ・これを根拠として市民合意が形成され、市の施策事業により里地里山の管理が積極的に促進・支援されている。

##### ★ 市民各層の能力・ニーズ・感情等に配慮した基盤的施策・事業の展開

- ・市の施策事業は、ハード（市民の活動に先立つ公共事業による里山整備等）、ソフト（里山利用協定の締結、人材育成・登録等）の両面から、協働による里山管理の共通基盤を形成することを狙いとしている。
- ・上記においては、「市の介在による土地所有者からの信頼感の向上」、「各主体の技術や能力に応じた役割分担」など、市民各層の能力・ニーズ・感情等がきめ細かく配慮されている。



市内の里地里山の景観（渋沢丘陵）



協働により管理されている里山

## 2) 取組の経緯

- ・平成 11 年度 「はだの森林づくりマスタープラン」の策定  
市による里山保全・活用関連事業の開始  
→「ふるさと里山整備事業」、「里山ふれあい森づくり事業」（内容は後述）
- ・平成 16～19 年 環境省「里地里山保全再生モデル事業」の実施
- ・平成 19 年度～ 神奈川県「かながわ水源環境保全・再生実行 5 か年計画」の開始  
(県が、秦野市が地下水保全のために実施する事業費を補助)
- ・平成 20 年度 「はだの一世紀森林づくり構想」の策定

## 3) 取組の目的・目標

秦野市は、里山保全・活用に関して、下記のような目的・目標を置いている。

### ≪目的≫「水源保全」が主目的、その他多様な公益的機能を視野に入れている

- ・「水源保全」が里山管理の主目的とされている。秦野市では水道水の約 7 割を地下水に依存していることから、この観点は市民の生命・生活と深く関わるため、一般に価値が認められやすい。
- ・また、「獣害対策」（イノシシ、シカ、ヤマビル）は、農林家の経済的被害や市民の健康被害に関わる観点であり、第二の重要な目的と見なされている。

### ≪目標≫「葉たばこ栽培が盛んだった頃の里地里山を、市民の協働で保全再生する」こと

- ・秦野市の里山管理の施策事業においては、目標とする状態として「葉たばこ栽培が盛んだった頃の里地里山を取り戻すこと」、そのための手段として「市民の協働」が位置付けられている。
- ・なお、環境省の「里地里山保全再生モデル事業（神奈川県秦野地域）地域戦略」では、下記の目標像が掲げられた。

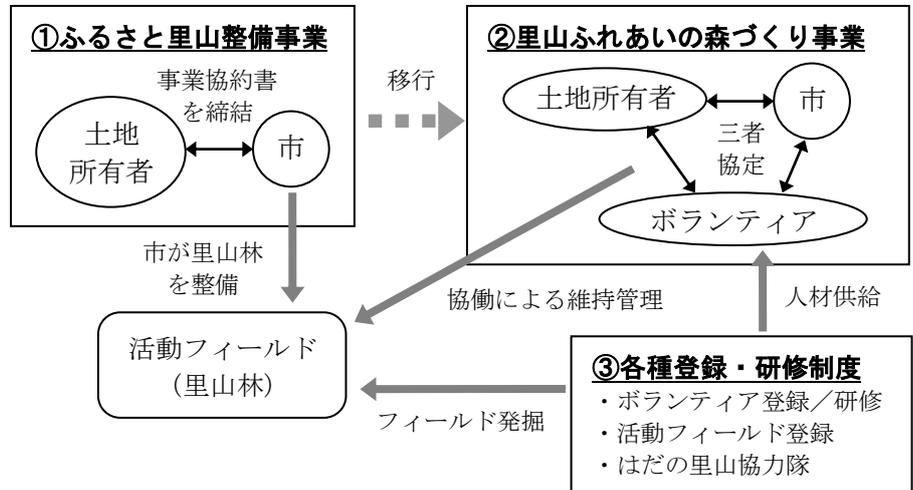
「里地里山の保全再生による地域社会の発展

～葉たばこ栽培が盛んだった頃の里地里山を、市民の協働で保全再生～

## 4) 取組の主な内容

秦野市による里山保全・活用の施策事業は、基本的には右図のような枠組みで実施されている。以下では、各施策事業の内容を個別に説明する。

なお、これらの施策事業のうち「①ふるさと里山整備事業」及び「②里山ふれあいの森づくり事業」については、平成 19 年度より、神奈川県「かながわ水源環境保全・再生実行 5 年計画」に基づき、秦野市が神奈川県から補助を受けて実施している。



(参考) 神奈川県の水源地保全施策と秦野市施策事業との関係

- ・神奈川県は、県が主体となった水資源対策を推進するため、「かながわ水源環境保全・再生施策大綱」及びこれに基づく「かながわ水源環境保全・再生実行 5 年計画」（平成 19～23 年度）を策定。
- ・5 年計画に基づく事業の財源として、「水源環境を保全・再生するための個人県民税超過課税」（平成 19～23 年度）を実施。
- ・秦野市域の全域が上記事業の対象となる「県内水源保全地域」に含まれており、5 年計画の「特別対策事業 5：地域水源林整備の支援」に該当する事業として、神奈川県からの補助を受けて秦野市が「ふるさと里山整備事業」及び「里山ふれあいの森づくり事業」を実施している。

### ①ふるさと里山整備事業

【場所】 秦野市羽根、東西田原、弘法山、名古木、渋沢丘陵（平沢）、千村

【事業費】（平成 19 年度）44,114 千円

【内容】 平成 15 年度に市が実施した「里山林保全調査」の結果を基に、地域水源林の手入れの必要な私有林、組合有林等を対象にして、秦野市と森林所有者が事業協約書を締結し、秦野市が森林整備を実施する。（平成 19 年度森林整備面積 31.52ha）

【ねらい・ポイント等】

- ・長年管理が行われていない里山林を、所有者やボランティアだけの力で一から再生することは、負担が大きく困難なことが多い。
- ・そこで、まず市が「ふるさと里山整備事業」によって公共事業として整備（間伐や皆伐等）を行ったうえで、そこに下記の「里山ふれあい森づくり事業」を活用してボランティアを招き入れ、維持管理を行ってもらうというスキームを取っている。
- ・整備は森林組合や林業事業者への委託事業により実施される。市内に本格的な森林整備を実施できる事業者が 6 つほど存在する（森林整備基本研修を終了している業者でないと、能力・技術的に厳しい）。

## ②里山ふれあいの森づくり事業

【場所】 秦野市内 26 箇所

【事業費】 (平成 19 年度) 3,436 千円

【概要】 地域水源林の手入れの必要な里山林を対象にして、地主・ボランティア団体・市の 3 者協定を締結し、市が森林整備を行うボランティア団体に対して補助金を交付して実施する。(平成 19 年度森林整備面積 25.88ha)

【ねらい・ポイント等】

- ・前記の「ふるさと里山整備事業」で整備されたフィールド等を、ボランティアの参加により継続的に維持管理する。
- ・地主は、活動の核として位置付けられており、活動場所の提供や、過去の経験に基づく技術指導などを行う。
- ・ボランティアは、取組の主要なマンパワーとしての役割を担い、地主の指導のもとで管理作業や市民への普及啓発活動を行う。住宅地に住む退職者が中心である。
- ・市は、ボランティア団体に対して活動費等の支援を行う。市が介在することにより信用力が高まり、地主の協力が促進されている。
- ・ボランティア団体の中には、当初から自然環境保全や里山管理を行っていた団体だけではなく、小学校、ボーイスカウト、地域のスポーツクラブなど、多種多様なものがある。
- ・秦野市外からの参加も認めており、ボランティア団体への参加者のうち、およそ 6 割が秦野市民、残りの 4 割が市外居住者である。



「里山ふれあいの森づくり事業」によるボランティア団体の活動地上：「四十八瀬川自然村」  
下：「まほろば里山林を育む会」

## ③各種登録・研修制度

【ボランティア登録・活動フィールド登録】

- ・環境省の「里地里山保全再生モデル事業」の一環として、里山の保全・活用を担う人材の底辺拡大と技能向上を図ることを目的として、主に初心者を対象とする「ボランティア」の研修・登録、土地所有者や熟練者を対象とする「フィールドリーダー」の研修及び登録を開始した。
- ・また、同じくモデル事業の一環として、既に活動が行われているフィールドの進捗状況の把握、所有者がボランティアの参加による管理を希望するフィールドの把握等を目的として、「活動フィールドリスト／登録」を開始した。
- ・これらの仕組みは、前述の「ふるさと里山整備事業」や「ふれあいの森づくり事業」の人材供給源やデータベースとしての役割を果たしており、環境省モデル事業の終了後も継続している。

【はだの里山協力隊】

- ・団体に属さずに活動することを希望する市民向けに、「はだの里山協力隊」の制度を設けている(約 100 名が登録)。
- ・この制度は、ボランティア団体に参加していない市民だけではなく、ボランティア団体に加入しつつ他の団体の活動への参加を希望する市民も活用できる。

## 5) 進捗管理及び成果

### ★ 担い手育成の面では目標を上回る成果が上がっている

- ・「秦野市総合計画 ー第三期基本計画ー」(平成 18~22 年度)では、里地里山の保全・活用に関する下記の目標を設定している。このうち「ボランティア団体数」については、平成 20 年の時点で既に目標を上回っており、担い手育成の面で成果が得られている。
- ・これら以外に目標・指標として位置付けられているものはないが、現在、里山管理による二酸化炭素吸収量を算定中である。

○里地里山保全再生ボランティア団体数

- ・現状値 (平成 17 年) : 12 団体
- ・目標値 (平成 22 年) : 20 団体
- ※平成 20 年現在 : 26 団体

○生き物の里の指定箇所数

- ・現状値 (平成 17 年) : 2 件
- ・目標値 (平成 22 年) : 10 件
- ※平成 20 年現在 : 4 件

## 6) 外部評価

### ★ 「NPO 等による自主的な取組」や「協働による取組」が高い評価を受けている

- ・秦野市では、従来から行われてきた NPO 等による自主的な取組や、旧住民・新住民・行政による協働の取組が高い評価を受けている。
- ・平成 16~19 年度には、環境省による「里地里山保全再生モデル事業」の対象地域 (全国 4 箇所) の 1 つとして、「神奈川西部地域 (秦野市等)」が選定された。
- ・また、平成 4 年から市内で活動し、活発な市民団体の一つである「NPO 法人自然塾丹沢ドン会」は、長年にわたる登山道の補修ボランティア、自然観察、棚田の復元などの活動が評価され、平成 15 年に国土交通省による「手づくり故郷賞・地域活動部門」、平成 17 年に環境省による「みどりの日・自然環境功労者表彰環境大臣表彰」などの表彰を受けている。

## 5. 今後の課題

---

### ★若年層への普及啓発と参加促進《担い手確保・技術継承の側面から》

- ・市民ボランティア団体数及び参加者数は順調に増加しているが、新住民の参加者の大半が退職者等の高齢者である。
- ・このままでは、かつての良好な里山の姿やそれを支えた技術が次世代に伝わらない可能性が高く、今後はより若年層への普及啓発と活動への参加促進が不可欠と考えられる。

### ★バイオマス利用や発生材の農地還元の推進《物質循環の側面から》

- ・「葉たばこ栽培が盛んであった頃の里山」を目標としているが、現在の取組は樹林地の管理に留まっており、循環の再構築までには至っていない。
- ・今後は、現在行われている植物発生材の利用（表丹沢野外活動センターのチップボイラーへの活用、シイタケ栽培への活用等）をさらに充実させ、バイオマス等新たな形での森林資源の利用や、樹林地と農地との連携の復活などの取組が必要と考えられる。

### ★里地里山全体としての総合的な取組に向けた多分野連携《活動の組織体制の側面から》

- ・ここで事例として紹介している内容は、秦野市の森林づくり課が実施する樹林地を対象とする施策であるが、森林に隣接する農地の保全に関する施策や、希少動物保全等の自然環境保全の施策は、別の部署により実施されており、十分な連携が図られているとは言えない。
- ・本来は里山（林業サイド）、農地（農業サイド）、自然環境保全（環境サイド）を総合的に捉えることにより、里地里山全体として保全・活用の取組を展開することが必要と考えられる。

### ★里山における「生業」の復活に向けた取組《活動資金の側面から》

- ・現在は、神奈川県の水環境税を投入できることもあり資金面で比較的恵まれているが、これは限定的措置であり、また、未だ管理が行き届いていない樹林地が多いことから、現状では必ずしも持続的に活動資金が確保されているとは言えない。
- ・資金面の持続性を高めるため、農業者やボランティア団体による農産物・林産物の加工・販売等の取組により、かつての樹林地と農地との関係を復活させつつ、資金面での自立を図る取組が必要と考えられる。

## 事例 No.2 高知県高岡郡四万十町

### 1. モデル地域の概況（基礎データ）

範囲	・高知県高岡郡四万十町（総面積 642km <sup>2</sup> ）	
立地条件	<b>★ 四万十川中流部の中山間地に位置する</b> ・高知市から直線距離で約 50～70km、自動車です約 1 時間半～2 時間半	
自然条件	土地利用・植生	<b>★ 人工林を中心とする山々に囲まれ、谷間の河川沿いで暮らしが営まれている</b> ・四万十川流域は我が国有数の林業地域であり、流域総面積のうち約 8 割が森林であり、そのうちヒノキ・スギを中心とする人工林が約 7 割を占める。 ・山々の間をぬって、四万十川及びその支流が蛇行しながら流れ、数少ない谷底や中州が集落・農地として利用されている。 ・四万十町単独では、町の総面積 642km <sup>2</sup> のうち、林野が 87.1%を占め、農地は 4.8%である。
	地形・水系	<b>★ 四万十川と地域の暮らしが関わり合った山里の景観が形成されている</b> ・地域を貫いて流れる四万十川及びその支流は、今なお飲料水や生活水の供給源や内水面漁業の場として利用され、また、かつては木材や生活物資の運搬路として利用されるなど、人々の暮らしと深く関わってきた。 ・その中で、古くから谷底の狭い平地や中州に形成されてきた農地、戦後に建設された「沈下橋」（増水時には水面下に潜ってしまう橋）など、地域固有の景観が形成されてきた。 ・上記の河川と地域の暮らしが関わり合って形成された景観が評価され、平成 20 年 11 月には、国の文化審議会が「四万十川流域の文化的景観—中流域の農山村と流通・往来」を国の重要文化的景観に選定するよう文部科学大臣に答申した。
	特徴的な動植物の生息・生育状況	<b>★ 多種多様な川魚等が生息し、内水面漁業も盛んである</b> ・四万十川及びその支流は、大きなダムが少なく水質が良好であるため、ウナギ、アユ、アオノリ、テナガエビなどの多種多様な川魚が生息し、古くから山間部の貴重なタンパク源として漁業の対象とされおり、「川漁師」が現存する。 ・また、アカザやメダカなど、環境省 RL 掲載種も生息している。
社会条件	歴史	<b>★ 古くから林業を中心とする山村の営みが継承されてきた</b> ・古代・中世に「陸の孤島」「遠流の国」と呼ばれていた土佐国の中でも最奥部に位置し、古くは自給自足の山村生活が営まれていた。 ・土佐のヒノキ・スギは古くから名産品として名高く、四万十川中流部でも中世より林業が営まれ、川を使った木材流送が行われてきた。 ・昭和 30～40 年代の拡大造林政策により、薪炭用のシイ・カシ林からスギ・ヒノキ林への転換が進み、人工林が大半を占める景観が形成された。
	人口	<b>★ 急速に人口減少・高齢化が進んでいる</b> ・平成 7～17 年の間に総人口が約 11%減少している（23,081 人→20,527 人）。 ・平成 17 年の高齢化率は約 35.0%であり、高知県（25.9%）及び全国（20.1%）の値を大きく上回っている。
	産業（特に農林業）	<b>★ 農林業の担い手の高齢化が進んでいる</b> ※調査中



図 四万十町の位置



図 四万十川の景観（左：河川沿いの景観 右：沈下橋）

※作成中

図 四万十町の人口動向

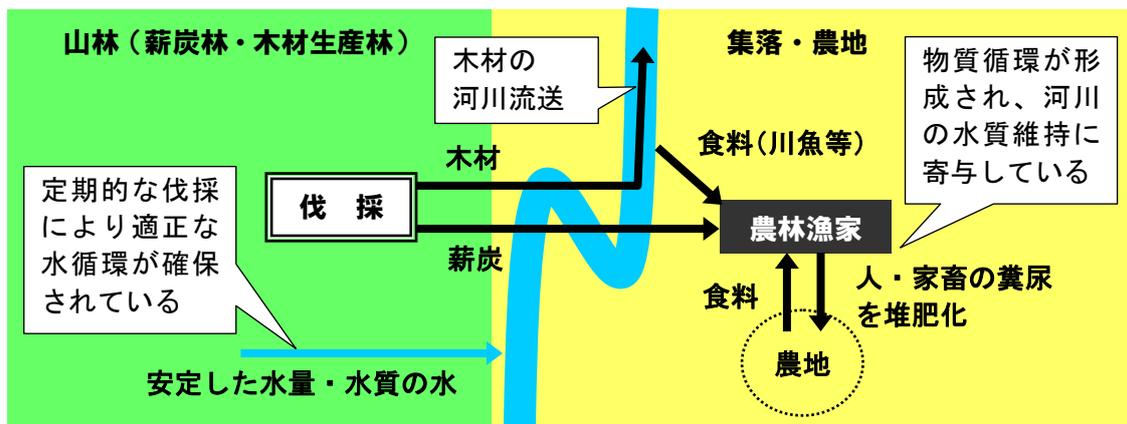
## 2. かつての里地里山の姿

### ★ 木材生産林・薪炭林としての持続的な森林の活用

- ・戦前までの四万十川流域では、シイ・カシを主体とし薪炭林として利用されていた天然林と、木材生産を目的としたヒノキ・スギなどの人工林が併存していた。これらの森林では、定期的な伐採により持続的に管理されてきた。
- ・昭和 30～40 年代の拡大造林政策により、天然林から人工林へと転換が進んだが、木材需要が旺盛であったころには樹林の手入れが継続されていた。

### ★ 物質循環・水循環に支えられた「川と共生する暮らし」

- ・四万十川流域の集落・農村では、家畜や人間の糞尿を原料として堆肥を生産し、農地に還元するという有機性資源の循環利用が行われてきた。また、前記のように森林管理が行き届いていたため、森林から河川に流れ込む水量が安定しており、また、土砂の流入量も少なかった。
- ・これらの適正な物質循環・水循環により、四万十川の水質が良好に保たれ、流域の人々は川魚等の水産物、良好な生活・農業用水などの自然の恵みを獲得し、「川と共生する暮らし」を営んできた。



かつての四万十川中流における人と河川・山林との関わりのイメージ

### 3. 里地里山の現状（問題点）

#### ★ 木材需要の減少に伴う森林の荒廃

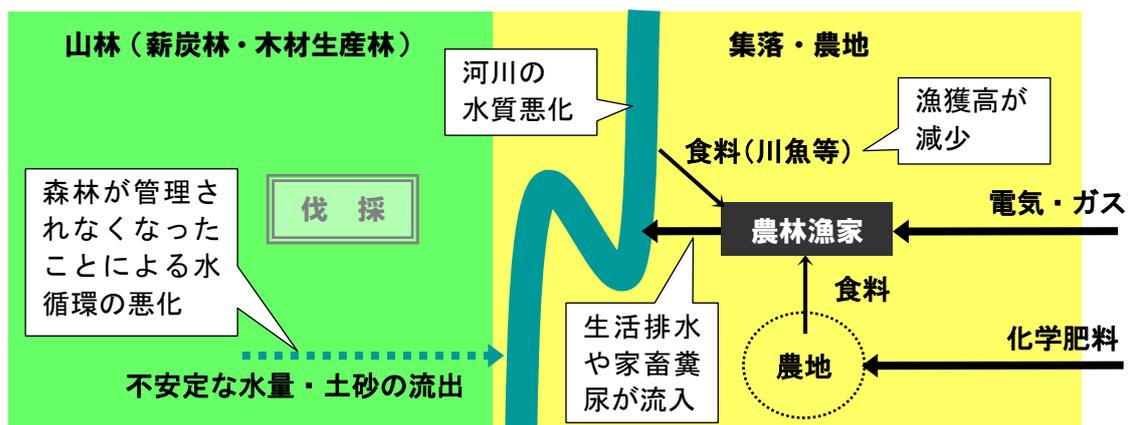
- ・成熟した広葉樹林やよく管理された人工林の土壌は、水や砂などの流出抑制効果を発揮する。
- ・四万十川流域では、昭和 30 年代からスギ・ヒノキを中心とした人工林が主体となり、昭和 45 年ごろには人工林と天然林の比率が逆転した。さらに、林業の衰退により森林の適正な管理が行われず、その多くが放置されたままとなっている。

#### ★ 水質の悪化と水産資源の減少

- ・生活排水や家畜糞尿が河川に流入することにより、水質が悪化している。近年は生活排水対策や水質浄化等の取組みが進み、BOD などの指標は改善されつつあるが、より一層の対策がもてられている。
- ・水質悪化の一因として、森林の適正な管理が行われなくなり、流水や流砂の調整機能が低下したことがあると指摘されている。
- ・水質悪化の影響で、水産資源の漁獲量が減少している（アユは昭和 50 年：1,600t → 平成 10 年 200t、藻類は昭和 50 年代までは約 200 トン前後 → 昭和 59 年以降は 100 トン前後に減少）

#### ★ 人と河川・山林とのつながりの喪失に伴う地域活力の低下

- ・かつて、地域住民は、四万十川や山林から農林水産物を獲得し生計を立てていたが、社会経済情勢の変化、自然環境の悪化によって、今日では人と河川・山林とのつながりが失われている。
- ・地域経済を支えてきた農林水産業の低迷により地域の活力が失われ、住民の高齢化や人口減少が進み、それが更に森林・河川の利用を減少させるという悪循環が形成されている。



現在の四万十川中流における人と河川・山林との関わりのイメージ

## 4. モデル地域における里地里山の保全・活用の取組

### ～一次産業から持続的な地域づくりを目指す「四万十ドラマ」の取組～

#### 1) 取組の実施主体・体制

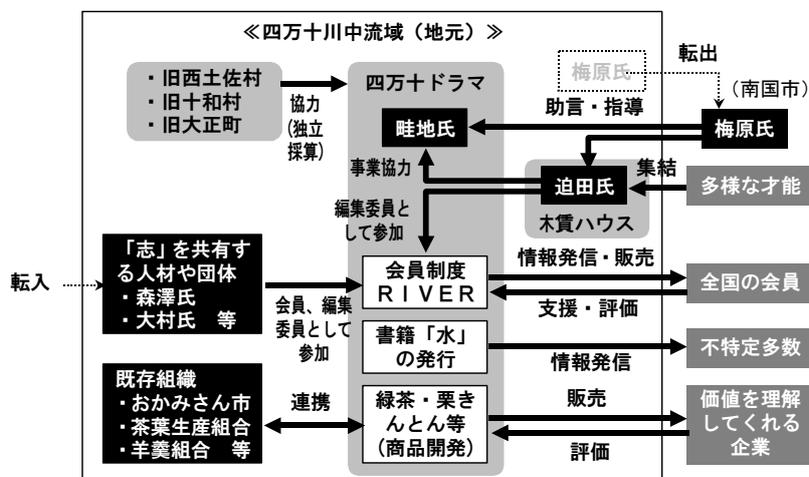
四万十川中流部では、住民・事業者・行政それぞれの立場から、地域活性化や四万十川の環境保全の取組が行われている。

こうした中で、平成6年に設立された「株式会社 四万十ドラマ」（設立当時は第三セクター企業、現在は民営企業）は、地域の天然素材にこだわった商品開発・販売等に取り組み、成果を挙げている。

#### 《株式会社 四万十ドラマ》の会社概要（平成20年現在）》

- ・創業 平成6年11月1日
- ・代表取締役 畦地履正 氏
- ・資本金 1200万円
- ・株主 町民110名
- ・職員 従業員5名、パート15名
- ・年間売上額 2億5千万円
- ・主な事業内容
  - ・地域の天然素材にこだわった商品開発・販売
  - ・道の駅「四万十とおわ」の運営
  - ・自然体験事業「四万十また旅プロジェクト」
- ・その他
  - ・会員制度「RIVER」の会員は、全国各地に約1,000名
  - ・地元の生産者、デザイナーなどがRIVERの編集委員として参加。

四万十ドラマは、自ら生産を行うのではなく、商品の開発・販売を通じて、外部の人や組織と地元の人や組織を結びつけるコーディネート役を担い、下記のようなネットワークの中核となって事業を展開している。



四万十ドラマを中心とする人材ネットワークの概念図

## 2) 取組の経緯

- ・平成6年 旧大正町、旧十和村、旧西土佐村の出資による第三セクター企業として、「株式会社 四万十ドラマ」が誕生、現社長の畦地氏が専従職員として採用される
- ・平成8年 会員制度「RIVER」の創設  
四万十川から連想される「水」をテーマとした著名人のエッセイ集の発行
- ・平成9年 第1号商品「四万十のひのき風呂」の発売  
以降、地域内外との人材連携により多数の商品開発・販売を実施
- ・平成16年 インターネット通販「四万十てんねん良心市場」の開始
- ・平成17年 純民間企業として再出発
- ・平成19年 指定管理者として道の駅「四万十とおわ」の運営を開始  
「四万十また旅プロジェクト」の開始

## 3) 取組の目的・理念

四万十ドラマの設立目的は、「地域活性化」「人材育成」「商品開発」であったが、専従職員として採用された畦地氏は、地元に住んでいたデザイナー・梅原氏の全面協力・指導のもとで、下記の理念に基づく企画書を作成した。

これによって四万十ドラマの実施的な活動が開始され、今日まで引き継がれている。

### 《四万十ドラマの経営理念と展開》

#### ★ 四万十川に負担をかけない天然物のモノづくり

- ・企画書作成者の一人である梅原氏は、「沈下橋で遊ぶ子供や川と関わりあう暮らしがあること」に魅せられ、四万十川の質的な価値が失われてしまうとの強い危機感を持っていた。
- ・そこで、経営理念の一つとして、「四万十川に負担をかけない」という地域の持続的発展の観点を盛り込み、地域の天然素材にこだわった商品開発と販売事業を行うこととした。
- ・この理念を具現化した商品として、間伐材を利用した浴室用のひのき芳香剤「四万十のひのき風呂」、地元の茶葉だけを使ったペットボトルのお茶「しまんと緑茶・ほうじ茶・紅茶」などを開発し、全国に「四万十ブランド」の商品を展開している。

#### ★ 人の力や知恵を最大限に吸収するためのネットワークづくり

- ・担い手が減少している中山間地において地域資源を発掘・活用していくためには、単なる1企業の動きではなく、内外の人材・知恵・資金の結集が不可欠であると考えた。
- ・四万十ドラマは、自ら生産を行うのではなく、商品の開発・販売を通じて、外部の人や組織と地元の人や組織を結びつけるコーディネーター役を担い、ネットワークを拡大させてきた。
- ・こうした動きにより、外部から「知恵」や「販路」を獲得し、これを地域に根付く「生産」と結びつけることで、地場産品の付加価値を効果的に高めることに成功している。

## 4) 取組の主な内容

### ① 地域の天然素材にこだわった商品開発・販売

(株) 四万十ドラマは、当初から下記のような地域の天然素材にこだわった商品開発・販売をすすめることにより、「四万十ブランド」を確立していった。

#### 《第1号商品「四万十のひのき風呂」の開発と成功》

- ・「天然モノの素材を活かした商品開発」の第1号として、未利用の森林資源に着目し、「四万十のひのき風呂」(ヒノキの端材にオイルを染みこませて作った浴室用芳香剤)を開発した。
- ・これが四国の企業が販促グッズとして大量に採用されて話題を呼び、企業との取引が拡大し、トータル50万枚、1億円を売上げるヒット商品となった。
- ・取組への地域の理解を得るためには、「アイデアが金を生む」という成功例を見せることも重要であり、「四万十のひのき風呂」の成功が、事業の成長に向けた大きなターニングポイントとなった。

#### 《商品開発・販売とネットワークの拡充》

- ・「天然モノの素材を活かした商品開発」は、その後も継続的に行われており、既存の組織や各集落の個性的産物を掘り起こした商品化に取り組んでいる。
- ・ヒット商品としては、これまで静岡に出荷されていた茶葉を使ったペットボトル茶「四万十緑茶・ほうじ茶・紅茶」、古くから栽培されていた栗農家と地元の羊羹組合との連携による「栗きんとん」などの加工食品、地元の新聞紙をリサイクルした手作りバッグなどがある。
- ・これらの商品開発・販売は、地域の既存生産・販売者である「茶葉生産組合」「羊羹組合」「おかみさん市」(安心・安全な農作物の直売を行う地元農業者組織)などとの連携により実施されている。四万十ドラマからの智恵やノウハウの提供により、既存生産者・販売者による資源発掘、商品化の発想、販路の確保等が可能となった。

#### 《商品開発・販売を支える「トンチ」や「デザインセンス」》

- ・初期の商品企画においては、企画書作成者の一人であるデザイナー・梅原氏の果たした役割が大きい。梅原氏は、持ち前の「トンチ」と「デザインセンス」を発揮して、「天然モノ」にふさわしい商品のネーミング・パッケージデザイン等を手がけた。
- ・Iターン移住者であるデザイナーの迫田氏は、梅原氏のアドバイスを受けつつ、この「トンチ」と「デザインセンス」を吸収し、現在では取組の中心人物の一人になるまで成長し、商品企画や後述する道の駅のトータルデザインを手がけている。



しまんと緑茶



四万十のひのき風呂

表 (株) 四万十ドラマ取扱商品における「四万十川に負担を掛けない“天然モノ”の視点」の例

商品名	概要	商品開発・販売体制	四万十川に負担を掛けない“天然モノ”の視点
四万十のひのき風呂	ヒノキの端材にオイルを染みこませて作った浴室用芳香剤	・(株) 四万十ドラマが開発、販売を実施。	<b>★未利用森林資源(ヒノキ)の活用</b> ・未利用の森林資源(ヒノキ)を商品化することにより、地域資源活用の可能性と森林環境保全の問題提起を発信。
四万十川新聞バック	地元の新聞(高知新聞)の古新聞を再利用した手作りバック	・農家の主婦が作った古新聞バックを(株) 四万十ドラマが商品化し販売。	<b>★「リサイクル」の思想</b> ・四万十川に負担を掛けない「リサイクルの思想」を発信する。 ・地元 PR を図るため、高知新聞の古新聞のうち、特に四万十の記事が載ったものを中心に選んで使用している。
四万十緑茶・ほうじ茶・紅茶	地元茶葉 100%の緑茶・ほうじちゃ・紅茶(ペットボトル、リーフタイプの2種)	・広井茶生産組合(しまんと茶工場)と(株) 四万十ドラマが共同で商品化。 ・組合によるインターネット直売や、(株) 四万十ドラマによる販売を実施。	<b>★「地元産 100%」へのこだわり</b> ・静岡に出荷されていた茶葉を、地元ブランドとして加工・出荷。 ・キャッチフレーズは「四万十茶葉だけ 100%」であり、緑茶・ほうじ茶は、地元産茶葉の一番茶のみを、紅茶は煎茶用品種の二番茶のみを使用。
シマントウオンテッドジャーキー	有害鳥獣として駆除された鹿肉をくん製に加工	・「しまんとのもり組合」(有害鳥獣駆除肉の活用組合)が商品化 ・組合によるインターネット直売や、(株) 四万十ドラマによる販売を実施。	<b>★有害鳥獣駆除肉の活用</b> ・「害獣を益獣」という発想から、農地や森林に損害を与えているシカの駆除肉を活用。 <b>★「地元産 100%」へのこだわり</b> ・調味料は全て四万十川流域産のものを使用。

## ② 道の駅「四万十とおわ」の運営

- ・平成 19 年 7 月より、四万十町が所有する道の駅「四万十とおわ」の指定管理者として運営に当たっている。
- ・運営理念として「自然も人も循環する滞留型の道の駅」を掲げ、地場産品にこだわった飲食サービスと商品販売、「おかみさん市」と連携した郷土料理バイキング、「四万十また旅プロジェクト」の体験プログラム(下記参照)など展開している。
- ・当初は 3 年目からの黒字経営を目指していたが、開設から平成 20 年月までの 1 年 2 ヶ月で来場者数が 20 万人を超え、初年度から黒字経営を達成している。

## ③ 四万十また旅プロジェクト

- ・体験型観光地としての「四万十川流域」の認知を図り、観光・集客の増加を目指すとともに、それに付帯して新しい地域産品(観光商品を含む)を開発し、地域に根ざした新しい産業興しを図ることを目的として、様々な体験観光プログラムを提供している。
- ・四万十川の各エリアに引き継がれている自然環境と密接に繋がった人の暮らしと風景「＝四万十の日常」を素材として、地域の人々が先生役となり、「川の漁業体験(ウナギ、ツガニ等)」、「農産物収穫・販売体験(シイタケ、茶等)」、「地元素材を使ったクラフト体験(マイ箸、新聞バック等)」などのプログラムが提供されている。

- ・なお、この事業は、経済産業省の平成 19 年度広域・総合観光集客サービス支援事業の採択を受け、四万十川流域（上流～下流 196km）の観光資源を連携させて、回遊・滞在型観光ができる仕組みを構築する事を目的としており、(株)四万十ドラマが運営する道の駅「四万十とおわ」を含む 7 施設の連携により実施されている。

- ◀「四万十また旅プロジェクト」の参加施設▶
- ・道の駅「四万十とおわ」
  - ・四万十屋（郷土料理店）
  - ・四万十・川の駅 カヌー館
  - ・四万十カヌーとキャンプの里かわらっこ
  - ・しまんとアロエ（特産品であるアロエの加工・販売事業者）
  - ・大正町市場（旧大正町の市場）
  - ・ネストウエストガーデン土佐（レストラン・ホテル）



「四万十また旅プロジェクト」の一例（パンフレットの抜粋）

## 5) 取組の成果

### ★ 販売額が順調に増加し、地域の生活・環境を支えてきた一次産業を活性化している

- ・四万十ドラマの売上額は、平成 7 年度の約 1,000 万円から順調に増加し、平成 19 年には役 2 億 5 千万円にまで成長している。
- ・これらが売れることにより、農林漁家たちの収入や生産意欲が向上し、地域の持続的発展に大きく寄与している。
- ・また、これまでの取組が各方面で評価され、四万十ドラマ及び協力関係にある生産者等が、国や県からの表彰（詳細は「6）外部評価」を参照）を受けるなど、新聞・テレビ等のマスコミに取り上げられる機会が増加し、さらなる意欲向上に結びついている。

### ★ 従来の農林水産家に加え、新たな担い手が育っている

- ・人口増加などの具体的な数字に表れるまでには至っていないが、四万十ドラマの活動がきっかけとなり、梅原氏から迫田氏へのデザインの継承や、地域外からの若手農業者の移住など、新たな担い手が育ってきている。

## 6) 外部評価

### ★ 一次産業を軸とした地域活性化の取組が高い評価を受けている

◀ (株) 四万十ドラマの取組への表彰 ▶

- ・農林水産省から「立ち上がる農山漁村」に選定（平成 18 年度選定）。
- ・高知県から「平成 19 年度 地場産業大賞 大賞」を受賞（受賞件名：「道の駅『四万十とおわ』の活用による地域活性化」）。
- ・高知県から地産地消優良活動表彰「平成 20 年度 おいしい風土こうち大賞」の特別賞を受賞

◀ (株) 四万十ドラマと連携している取組への表彰 ▶

- ・「おかみさん市」が、農林水産省による「平成 17 年度 農林水産祭・むらづくり部門」で総理大臣賞を受賞。

### ★ 文化審議会が「四万十川流域の文化的景観を「重要文化的景観」に選定するよう答申

- ・(株) 四万十ドラマの取組に対する評価ではないが、取組の舞台であり、経営理念にも盛り込まれている四万十川の景観は、「川と人々の暮らしが関わり合って形成された景観」として従来から高く評価されている。
- ・平成 20 年 11 月には、国の文化審議会が「四万十川流域の文化的景観—中流域の農山村と流通・往来」を国の重要文化的景観に選定するよう文部科学大臣に答申した。

#### ◀ 「四万十川流域の文化的景観—中流域の農山村と流通・往来」の概要 ▶

1. 文化的景観の名称：「四万十川流域の文化的景観—中流域の農山村と流通・往来」
2. 文化的景観の種類：選定基準 二 複合による景観地
3. 文化的景観の所在地及び面積：四万十町大正中津川 352 番地 他 13,392.7ha  
※四万十川の本流と支流の梶原川、中津川、日野地川、それらの河川から一番近い山の第一稜線までの範囲、及び国有林、町有林（久木ノ森山風景林）からなる約 13,392.7ha の地域
4. 四万十町文化的景観の特性：
  - ・四万十町における文化的景観選定申出範囲は「梶原川下流域（奥四万十区域）」と、山間を蛇行する流路を繰り返し流れる大正地域と十和地域の「四万十川中流区域」、谷底堆積平野によって形成された地形の窪川地域の「高南台区域」に 3 区分される。
  - ・梶原川下流域の大正奥四万十区域は四万十川に比して川幅が狭く、山間地であるため急峻な地形は平地が少なくまとまった耕地を持たない。農耕は主に山地を開いた棚田や段畑での耕作で、このため生業を林業に求めてきた地域である。梶原川流域の林業活動はその良材の豊富さと、河川による木材の大量運搬に適した地形から明治期から昭和期にかけて活発に行われた。その集落の一つに中津川地区がある。中津川地区は藩政期の御留山を経て明治期からの林業活動により発展した集落である。
  - ・四万十川中流域は突入蛇行を繰り返し流れる四万十川沿いに棚田状に開墾した農地とともに集落が点在する。農家は経営規模が小さく農業を主体としながら副業に生業を求める者も多い。陸路の発達が不十分な頃、水量の多い四万十川は河口に下田港を控え、木材の大量運搬に適していたため、林業の繁栄とともに水運が発達し、それに伴い河川沿いの集落は四万十川の流通・往来を支える重要な役割を担ってきた。
  - ・高南台区域は仁井田米に代表される県下有数の穀倉地帯である。流域の稲作の歴史は古く、比較的開放感のある高南台地を四万十川が穏やかに流れる。本流に築かれた堰や水路により豊かな四万十川の清流が広大な水田に導かれ、農地を潤している。中世・藩政期に新田の開発が活発に行われたが、谷水だけでは開墾地を水田と化すことはできず、新田開発の最大の課題は灌漑用水の確保であった。現役の堰や水路は先人たちの苦難の農業の歴史であり、高南台地の農業を今に伝える貴重な文化的景観である。

## 5. 今後の課題

※追加ヒアリングが必要、今後作成

## 事例 No.3 輪島市町野町金蔵地区

### 1. モデル地域の概況（基礎データ）

範囲	・石川県輪島市町野町金蔵地区	
立地条件	<b>★ 能登半島北部・輪島市の北端に位置</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・金沢市中心部から直線距離で約 100km、自動車約 2 時間</li> <li>・能登空港から直線距離で約 16km、自動車約 20 分</li> </ul>	
自然条件	土地利用・植生	<b>★ 歴史のある社寺と棚田を併せた農村風景</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・この地区には棚田が広がり、その中に民家が点在している。</li> <li>・室町期の集落の趣きを残している。</li> </ul>
	地形・水系	<b>★ 3つの山に囲まれた盆地</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・天笠山、たかつぼり山、金蔵山という 3つの山に囲まれた小さな盆地に位置しており、大きな川もないため、かつては水に不自由していた。現在は保生池と呼ばれる溜め池を水源とし、さらに保生池から水を承ける溜め池が集落内に複数存在する。</li> <li>・金蔵の集落からは四方に向かう道があり、古くからこの地域の中心集落であった。</li> </ul>
	特徴的な動植物の生息・生育状況	<b>★ 典型的な里地里山の自然</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・金沢大学により生物調査が実施されている。</li> <li>・集落の水源となっている保生池には毎年、オシドリが群れで飛来する。</li> <li>・トキを放す場所としても良いのではないか、とも考えられている。</li> <li>・周辺森林はスギ・ヒノキ・アスナロ林が多い。</li> <li>・地区内に散在する溜め池の多くでクロサンショウウオ・モリアオガエルの産卵が確認されている。</li> <li>・シダ植物以上の維管束植物 579 種の分布が確認されている。</li> <li>・石川県版レッドデータブック記載種として、水辺ではミズオオバコ、サンショウモ、キクモなどが、谷あいではコケイラン、ヒトツボクロ、キヨスミヒメワラビ、カラタチバナ、エビネ、ナツエビネなどの植物が確認されている。</li> <li>・金蔵で確認された帰化植物は 46 種で帰化率は 7.9%であった。帰化率は石川県の 8.5%、金沢市の 9.1%に比べ、やや低い。</li> </ul>
社会条件	歴史	<b>★ お寺を中心に千石在所として古くから栄えた</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・縄文時代の矢じりなども出土しており、その頃から人がいたと推測される。</li> <li>・集落の始まりは、岩倉山金蔵寺を中心として栄えた寺荘園である。</li> <li>・室町期の金蔵は奥能登の千石在所の一つであり、仏教田であったため、厳しい年貢の取り立てからも逃れることができ、お寺を中心として栄えていた。</li> <li>・室町期には畠山氏によって全村焼き討ちされたが、その後もかつての豊かさが忘れられず、お寺とその門徒を呼び込み、豊かな集落を再興した。</li> <li>・明治初期には金蔵の集落一つで小学校、郵便局が設置されるなど、町野の中心集落として栄えた。</li> <li>・山に囲まれたその地勢から水には不自由していたが、これを解決するため、明治期には高い土木技術を活かして、保生池（溜め池）とそれに繋がる隧道を完成させた。</li> <li>・戦時中の疎開の時には人口も多かったが、終戦後の昭和から平成にかけては減少する一方である。</li> </ul>

人口	<p>★ <u>かつては豊かで大きな集落であったが、現在は人口が減少</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・多いときで104戸あったが、昭和の時代から現在までに過疎化が進み、63戸（167人）まで減少した。集落景観を形成している民家も現在は36%が空き家である。</li> <li>・65歳以上が52.7%を占め、高齢化が進んでいる。</li> </ul>
産業（特に農林業）	<p>★ <u>農林業が衰退し担い手の高齢化が進んでいる</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・人口は減少する一方で、農林業の担い手不足は深刻である。</li> <li>・水田は台帳上では36haあるが、実際に耕作されているのは26haである。</li> </ul>

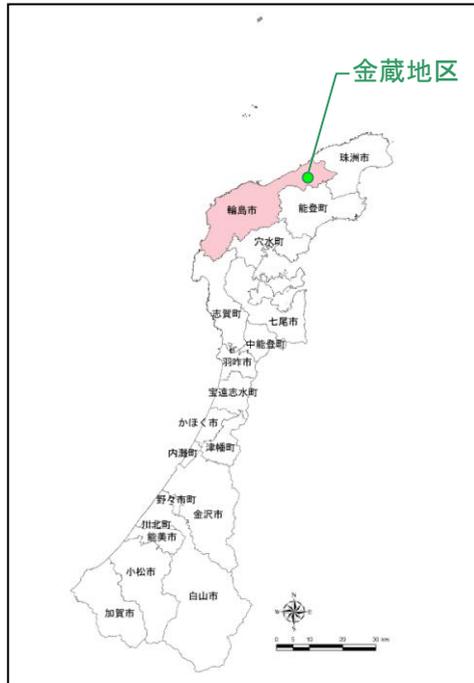


図 金蔵地区の位置



図 金蔵地区の地形の概要

## 2. かつての里地里山の姿

---

### ★ お寺を中心に栄え、多数の言い伝えが残る豊かな集落

- ・金蔵は古くは縄文時代から人がいたと推定され、集落としての歴史は飛鳥時代の岩倉山金蔵寺の開基まで遡る。
- ・数多くの言い伝えが残されており、その一つに「金蔵」の地名の由来に関する「金の鶴」伝説がある。
- ・「金蔵」という地名の由来には 2 説あり、金蔵寺（きんぞうじ）から「かなくら」となったという説と、岩倉山から金の鶴が舞っているのが見えたから、という説がある。実際に岩倉山山頂から金蔵の方向を見ると天笠山、たかつぼり山、金蔵山が並び扇のようになり、条件が良ければその扇の上に白山を望むことができる。金蔵は古くから山岳宗教に対する信仰心が篤いこともあり、岩倉山から見る白山の残雪が金の鶴が舞っているように見えたことから金の鶴伝説が生まれたのではないかという説もある。実際に金蔵の集落は岩倉山と白山を結ぶ直線上に位置する。岩倉山は白山の眺望点としては最北端に位置し、条件の揃う年間数回の機会しかこの光景は見られない。
- ・その他にも、金蔵を産み、国造りをした大人（おおひと）の伝説などの多数の言い伝えが残され、現在まで受け継がれている。
- ・室町期の金蔵は奥能登の千石在所の一つであった。勢至菩薩の仏教田だったため領主に年貢を納める事はなく、千石のうち五百石はお寺の受領となっていたと言われている。そのため、金蔵の住民たちは楽をして豊かに暮らすことができ、「極楽在所」や「なまくら在所」とも呼ばれたほどであった。
- ・室町時代（1527 年）に厳しい年貢の取立てを命じられた畠山氏によって全村焼き討ちされるが、その後もかつての豊かな暮らしが忘れられず、再びお寺とその門徒を呼び込み、町野の中心集落として栄えた。現在も金蔵五ヶ寺として 5 つの寺が残るが一つの集落でこれだけの寺があるのは珍しいことである。
- ・金蔵から四方へ向かう道があることから、金蔵がこの地域では中心的な集落であったことが伺える。
- ・明治時代には金蔵という一つの集落の中で小学校や郵便局が設置され、町野の中心集落として賑った。
- ・常に集落の中心であったお寺、千石在所の礎であった水田（棚田）、信仰心の篤い住民によって室町期の趣きを残す集落景観が保持されてきた。

### ★ 集落を維持してきた伝統的な仕組

- ・室町期に全村焼き討ちを受けた後、集落を再興するために、外部からお寺を呼び込んだ。お寺を呼び込む際には、各お寺と檀家との結びつきを維持したままにした。檀家との繋がりを維持することで、金蔵の集落の人口が少なくても、定期的なお講の際には各檀家が金蔵の集落に集まるため、その交流人口を利用して集落を維持し、町野の中心集落となるまで再興された。現在の金蔵五ヶ寺には 600 もの檀家があり、この檀家を 12 組に分けて、月 1 回のお講の当番にしている。
- ・古くから同じ水系を共有して生活していたため、住民達には一体感があり、集落内の事は常に一体となって行ってきた。明治期には集落の重要な水源となる保生池と、そこからの水を承る 11

の池が造られたが、この事業も集落の住民で均等に負担して行った。また、どれか一つでも池が損傷すれば集落の住民が一体となって補修を行っていた。集落内の水道整備の際も、その費用は集落内で均等に負担した。

- ・金蔵の集落の内部では住民が一体となり、集落の維持のための負担も均等に分かち合ってきた。一方で、複数のお寺を呼び込み、外部との多数の交流人口を有することで、集落内の人口が減少しても集落を維持することができた。内部の結束力と外部との交流が金蔵の集落を繁栄させてきた。

### ★ 金蔵集落の礎としての棚田

- ・金蔵は古くから千石在所として栄えたが、住民の豊かな生活を支えていたのが棚田であった。
- ・しかし、水利条件に恵まれているわけではなく、水に不自由することも多かった。水源を確保するため、明治期に保生池という溜め池と、そこへ繋がる 180m の隧道を造った。これにより水源は安定して確保されるようになった。また、この工事は、当時の土木技術の高さを証明するものであった。
- ・その後、保生池からの水をうける溜め池が下流に複数造られた。溜め池は金蔵の重要な水源になるとともに、里地里山の生物の繁殖地にもなっている。

## 3. 里地里山の現状（問題点）

---

### ★ 担い手の減少と物質循環・技術の喪失

- ・人口が減少する一方であり、棚田での農業や古くから伝わる歴史・伝説などの文化の継承の担い手不足が深刻な状況となっている。耕作地も台帳の上では 36ha となっているが、実際に耕作されているのは 26ha であり、遊休農地は 10ha 存在する。
- ・担い手が確保できたとしても、現在は農業だけで生活することは難しく、これまで金蔵の礎となってきた棚田の保全が難しくなっている。
- ・棚田を中心として里地里山の典型的な生態系が形成されてきたが、棚田の担い手の減少による遊休農地の増加とともに失われてしまう可能性がある。
- ・里山の集落景観を構成する民家も、人口の減少により 3 割以上が空き家となっている。居住者がいなくなり、管理されなくなった民家はいずれ荒廃し、集落景観の荒廃にも繋がる可能性がある。

### ★ 集落に伝わる歴史・文化の継承と効果的な発信

- ・長い歴史のある金蔵の集落には金沢大学をはじめとして、様々な研究者が訪れ、「民俗学を調べるならまず金蔵」と言われるほどの評価を受けている。有識者から高い評価を受けるような歴史・文化は伝統的な生活文化の知恵や技術の継承という観点から、外部へ発信する価値があると言えるが、効果的に発信する方法が確立されておらず、模索中の状態である。また、言い伝えが多く残されていることが金蔵の一つの特徴として挙げられるが、この代々受け継がれてきた言い伝えも、集落の人口がこのまま減少すれば、失われてしまう可能性がある。
- ・金蔵にはすでに多数の研究者が訪れているが、地元から研究者への情報提供や、研究成果の地元への還元など、研究者との円滑な連携体制の確立が望まれる。

## 4. モデル地域における里地里山の保全・活用の取組

### 1) 取組の実施主体・体制

金蔵地区では、地元住民が中心となって結成された「金蔵学校」が主な活動を行っており、研究機関である金沢大学とも連携している。120年以上の歴史を誇った金蔵小学校が平成9年に廃校になったときに、金蔵の中心にあった学校の大事さに気付き、「金蔵学校」という名で活動を始めた。金蔵にある「五つの寺と田と山」を活かした村おこしを行っている。

以下では金蔵学校と、金蔵における金沢大学の取組みについて記述する。

#### 《地元住民を中心とした活動のポイント》

##### ★ 金蔵を繁栄させた伝統的な仕組を現代に活かす

- ・金蔵を支えてきた内部の結束力と外部との交流が活動の思想の基になっている。内部の結束力を活かした集落をあげての村おこしを行い、外部との交流人口を増加させることで、かつてのような豊かな集落を再現することを目指している。
- ・集落の人口が減少しているため、まずは村おこしにより人を呼び込む必要がある。定住者が現れることが望ましいが、流動人口だけでも増加すれば、当面は集落を維持することができる。
- ・外部から人を呼び込むために、金蔵を「やすらぎの里」として整備を進め、外部からの来訪者の受入れ体制を整えた。

##### ★ 金蔵の見直しと発信

- ・有識者から高く評価されている歴史・文化は金蔵の財産であるとともに、外部への発信の有効な要素となる。
- ・金蔵地区での活動は、まず金蔵を見直す活動から始め、自分達も金蔵の歴史や文化などを学びながら、外部に向けて発信している。

##### ★ 地元と研究機関による「民学連携」

- ・里地里山の保全においては、専門的な能力のある研究機関との連携が効果的だと考えられるが、地元と研究機関のパイプ役として金沢大学の里山駐村研究員制度がある。金蔵地区の住民の一人も里山駐村研究員に委嘱されている。
- ・金蔵地区の自然環境に関する調査は、専門的な能力を持つ金沢大学を中心として行われている。



金蔵の棚田景観



正願寺（金蔵五ヶ寺の一つ）

## 2) 取組の経緯

- ・平成 9 年 地理的・文化的に金蔵の中心だった金蔵小学校が廃校となる。
- ・平成 12 年 「金蔵学校」を結成。
- ・平成 14 年 第 1 回 金蔵万燈会（かねくらまんとうえ）が開催される。
- ・平成 15 年 「NPO 法人 やすらぎの里 金蔵学校」となる。
- ・平成 17 年 金沢大学により「里山駐村研究員制度」が始まる。
- ・平成 18 年 金蔵自然文化研究所が開設される。

## 3) 取組の目的・目標

金蔵学校は、里山保全・活用に関して、下記のような目的・目標を置いている。

### ＜目的＞金蔵の再発見と新たな創出（集落の結束力を活かした村おこし）

- ・金蔵学校では「私が先生、あなたが先生」を基本方針とし、それぞれが持ち寄った思い、考えを述べることで歴史、文化、自然、社会、健康、生活を考察することとしている。
- ・以下の 3 つの活動を掲げている。
  - ①「やすらぎの里、金蔵」を発見：今に残る地名やお宮、お寺の由来・伝説を訪ねる。
  - ②「なつかしき、ふるさとの味」を各地に発信：金蔵産コシヒカリとすりわり汁、こげめしなどの金蔵の特産品を外部に向けて発信する。
  - ③「やすらぎの里、金蔵」を発信：四季折々の金蔵（集落、お寺の境内、山野草、花木など）を紹介する。

### ＜目標＞豊かだった頃の金蔵集落の再現

- ・担い手を確保して金蔵の集落として自立し、また、多くの交流人口も有しながら、古くから伝わる歴史・文化とともに、かつて「極楽在所」と呼ばれた豊かな金蔵集落を再現することを目標としている。

## 4) 取組の主な内容

金蔵学校による取組みと、金沢大学の里山駐村研究員制度について以下に記述する。

### ① やすらぎの里創り

#### 【内容】

- ・前段階としてやすらぎの里創り構想とそのマップを作成し、金蔵集落の整備方針を確認。
- ・集落の各所に標柱・案内板を設置。
- ・集落の景観をより良くし、外部に向けてアピールするため、ツツジ千本運動が始められた。その後、ツツジ千本運動は桜千本運動に変わり、現在までに400本の桜が植えられた。
- ・金蔵地区の重要な水源であり、農村の生物の生育・生息場にもなっている保生池の周辺環境整備を行っている。
- ・金蔵の見所や五ヶ寺の紹介、散策のモデルコース等を掲載した金蔵散策絵図を作成。

#### 【ねらい・ポイント等】

- ・やすらぎの里として集落を整備することで外部からの受け入れ基盤ができる。
- ・桜千本運動は視覚的な効果があるため話題性があり、外部にむけた効果的なアピールに繋がる可能性がある。
- ・金蔵散策絵図は慶願寺にあるカフェ「木の音」にて無料で配布されており、来訪者が金蔵の歴史や伝説を感じ、また、理解しながら散策できるようになっている。
- ・「日本の歩きたくなる道500選」にも選考された（詳細は「6）外部評価」を参照）。



お寺の由来を紹介する看板

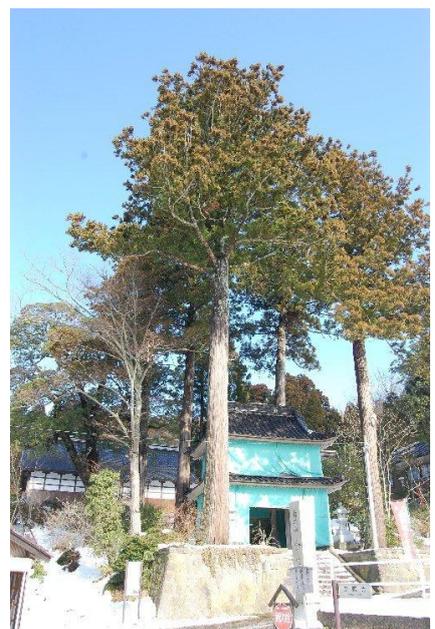
### ② 金蔵の歴史ほりおこし

#### 【内容】

- ・神社・仏閣や地名の由来、金蔵に残る伝説と、その位置図を示したマップを作成。
- ・町野町金蔵に関係する年表を作成。古くは古墳時代後記からの金蔵の変遷をまとめた。
- ・金蔵の伝説を主題にした絵本を作成。
- ・金蔵にある各お寺の由来のしおりを作成。
- ・金蔵小学校のアルバム集をビデオに収録し、大正から平成までの入学式・卒業式の写真を収集・編集した、20世紀データブックを作成。

#### 【ねらい・ポイント等】

- ・「歴史ほりおこし」を行うことで、まず、自分達が金蔵の良さを再発見、再認識することができる。自分達も金蔵に対する理解を進めながら、歴史、お寺、伝説といった金蔵を



金蔵寺（金蔵五ヶ寺の一つ）

象徴するものを外部に向けて発信してきた。

- ・20世紀データブックを作成することで、かつて地理的にも文化的にも金蔵の中心部に位置し、金蔵学校結成のきっかけにもなった金蔵小学校の歴史を再確認するとともに、記録として保存することができた。

### ③特産物の開発・発信

#### 【内容】

- ・金蔵の米をブランド化して発信。また、これとあわせて、金蔵の酒米から醸造した日本酒を「純米酒 米蔵金（まいぞうきん）」として発信。
- ・金蔵産の米と米蔵金のセットや古代米とも組み合わせた金蔵の特産物として発売。
- ・金蔵の休耕田で大豆を栽培し、近隣の珠洲市の塩、能登町の深層水を組み合わせたみそ造りを開始。

#### 【ねらい・ポイント等】

- ・棚田は平場よりも耕作条件が悪く、管理に手間がかかるうえ、農家の高齢化も著しいため、ブランド化などの工夫をしなければ効果的に収益を上げることが困難である。
- ・棚田米をブランド化し、付加価値をつけて収益を上げることで、金蔵の集落の礎となってきた棚田の保全に繋がるのが期待される。
- ・みそ造りでは、大豆の栽培による遊休農地の活用のほか、かつては一般家庭で行われていたみそ造の習慣を伝承することにも繋がる。
- ・地元の特産品の創出により、地産地消の動きにも繋がる。
- ・特産品の存在は金蔵を外部へアピールする効果的なツールになる可能性がある。

### ④オープンカフェ「木の音(こえ)」

#### 【内容】

- ・金沢大学の学生ボランティアの協力により、金蔵五ヶ寺の一つである慶願寺の渡り廊下を利用したオープンカフェを立ち上げた。
- ・古代米ケーキ&コーヒー、金蔵野菜入りピザ、金蔵団子、金蔵団子ぜんざい、古代米入りアイスクリームといった、金蔵に関連しながらもカフェらしいメニューを作成。
- ・ギャラリースペースにて、能登島ガラス工房研究生による「ゆらぎ展」、パッチワーク展、金蔵万燈会写真展などの展示も実施。
- ・その他、月見茶会、月見茶会俳句展、古布切れによる布ぞうり教室といったイベントも開催。
- ・金蔵の特産品のひとつであるもち米から16種の切り餅、かき餅を作成し、「黄金もち」の名で発信している。

#### 【ねらい・ポイント等】

- ・金蔵の象徴であるお寺の境内で喫茶を楽しむことができ、また、境内の四季折々の景色を楽しむこともできる。



慶願寺の渡り廊下にあるカフェ「木の音」

- ・イベントも行われるため、参加者の交流の拠点にもなる。
- ・特産品の商品化により、新たな外部へのアピールにも繋がる。

### ⑤一粒のともしび「金蔵万燈会」

#### 【内容】

- ・廃品回収ワンカップによるロウソクともしびを、五ヶ寺の境内、棚田の畦道、各民家などに約3万本設置。幻想的な雰囲気醸し出される。
- ・室町期に畠山氏の焼き討ちに逢い、五ヶ寺を中心に再興した歴史と先人を偲ぶ催しである。
- ・同時に「ともしびアート」や「金蔵音頭」の披露、写真コンテストなども開催され、地元住民による売店もあり、賑わっている。



金蔵万燈会の様子

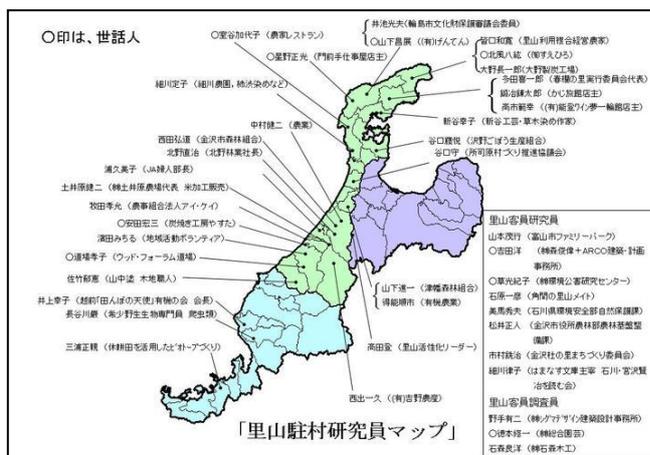
#### 【ねらい・ポイント等】

- ・3万本のロウソクが燈された集落は幻想的な雰囲気となり、多くの観光客が訪れる。年間で金蔵の集落が最も賑やかになるのがこのイベントである。
- ・平成14年に始まったが、金蔵の歴史を元にした新たな「祭」となっている。

### ⑥金沢大学による里山駐村研究員制度

#### 【内容】

- ・里山保全や地域の活性化などに取り組んでいる人を「里山駐村研究員」「里山客員研究員・客員調査員」に委嘱する。
- ・大学の里山研究に民間の力を加える「民学連携」の新しい試みとしてスタートし、現在は42人の里山駐村研究員が委嘱されている。
- ・研究員は、地域の里山活動に関する情報提供や大学への提言、研究者との意見交換など、大学と連携した活動を展開する。
- ・地域の要望や提案を集め、大学の研究活動に活かすための「情報収集」、大学が蓄積してきた研究成果を地域に活かすための「情報発信」、さらに、里山連携を軸とした民学連携の理念や方向性について理解を深め、地域振興、里山研究の活性化を目指す「勉強会」の3つを軸にしている。



里山駐村研究員の委嘱状況

#### 【ねらい・ポイント等】

- ・地元の人に研究員になってもらい、長年培った経験と知恵を大学の里山研究に活かしてもらおうのが狙いである。
- ・長年にわたって里山の保全や活性化に取り組んできた人たちが構成されており、地元の製材業者、木竹炭生産者、農産加工業者、「農家レストラン」経営者、草木染作家、天然塩生産者、山岳ガイド、介護ボランティア、郷土史家など幅広い「地域の専門家」が集う。
- ・「共同調査・研究」で大学が地域と連携し、地域の活性化を目指し、共同研究から、里山の資源を利用した新しい産業を創出することも目標の一つである。「産業=ビジネスモデルの提示」をす

- ることで、産業振興や過疎問題などの地域課題に、解決の道筋を付けて行きたいと考えている。
- ・金蔵地区においても、地元住民の一人が駐村研究員となっている。

### ⑦里山里海健康診断調査・金蔵自然文化研究所

- ・奥能登地域の里山・里海において、金沢大学が中心となり、「里山里海健康診断調査」と称した自然環境調査を実施。
- ・金蔵地区においても調査が行われている。
- ・金蔵地区の民家を借り、金蔵学校と金沢大学の共同で「金蔵自然文化研究所」が開設された。金沢大学の学生をはじめとした研究者の宿泊場所になるなど、研究活動の拠点の役割を担っている。



金蔵自然文化研究所

## 5) 進捗管理及び成果

### ★ 受入体制の整備

- ・やすらぎの里創りによる集落内の整備、金蔵散策絵図の作成、カフェ「木の音」のオープンなど外部からの来訪者を受入れる体制が整備されてきた。「日本の歩きたくなる道 500 選」（詳細は「6）外部評価」を参照）にも選考された。
- ・平成 21 年 1 月には「にほんの里 100 選」に選定された（詳細は「6）外部評価」を参照）。新聞を通じて金蔵の里山が全国に発信され、今後はテレビ番組でも紹介される予定である。また、朝日新聞社と JTB が「にほんの里」をめぐるツーリズムも企画している。
- ・金蔵集落の人口は減少傾向にあるが、人口 180 人程の集落に年間 8,000 人もの観光客が訪れるようになり、流動人口は以前の何倍にも増加している。

### ★ 棚田の保全に繋がる付加価値の創出

- ・「米蔵金」「黄金もち」といった棚田米のブランドができ、金蔵集落の礎である棚田の保全に向けて前進した。

### ★ 研究機関との連携体制の創出

- ・金蔵集落の住民の一人が里山駐村研究員となることで、金蔵と金沢大学との連携が円滑に行えるようになった。また、金蔵自然文化研究所も開設され、研究者はより金蔵に関する研究を行いやすくなった。
- ・金沢大学以外にも国連大学高等研究所に「いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニット」が開所され、金蔵の里山の研究・映像作品の作成等が行われている。

## 6) 外部評価

### ★ 伝統的な里地里山の景観とそれを活かす取組に対する評価

《金蔵地区としての評価》

- ・やすらぎの里として整備が進められてきた金蔵地区は、平成 16 年 12 月に「輪島・金蔵五ヶ寺を巡るみち」として「美しい日本の歩きたくなるみち 500 選（社）日本ウォーキング協会」に選定された。
- ・平成 21 年 1 月には、一向宗の里を感じさせる景観や、地域おこしのグループの活発な活動、金沢大学などの里山研究グループの受入等が評価され、「にほんの里 100 選（朝日新聞社、日本森林文化協会）に選定された。
- ・金沢大学の里山里海自然学校や国連大学高等研究所の「いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニットをはじめ、様々な研究機関が社会科学・自然科学の両分野で調査に訪れるなど、研究者から学術的にも高い評価を受けており、特に民俗学の分野では「民俗学を調べるならまず金蔵」と言われるほどの評価を受けている。

#### 《NPO 法人 やすらぎの里 金蔵学校の活動に対する評価》

- ・平成 18 年度には、特産物の創出、地産地消、都市と農村の交流、環境保全といった活動が評価され、「豊かなむらづくり表彰事業（農林水産省）」において北陸農政局長賞を受賞。
- ・平成 20 年度には、有志グループを中心とした集落を巻き込んだ大きな動きや、地域資源である寺院を巻き込んだ能登ならではの地域づくりなどが評価され、「過疎地域自立活性化優良事例（総務省）」において総務大臣賞を受賞した。また、「全国過疎問題シンポジウム 2008 in いしかわ」が輪島市で開催され、表彰された。

## 5. 今後の課題

---

### ★外部の力を借りた里山の維持《担い手確保・技術継承の側面から》

- ・金蔵学校の活動により、金蔵における流動人口は明らかに増加しているが、定住人口の減少傾向は変わらない。担い手の確保のためには、外部へより効果的な発信をしていく必要がある。
- ・今後は「あなたのふるさと創り」オーナーを展開して外部との交流を深め、また、外部の力を借りてやすらぎの里創りを進めていくことを構想している。

### ★里山における「生業」の復活に向けた取組《活動資金の側面から》

- ・「米蔵金」などにより、棚田の農産物をブランド化し、付加価値を高める努力をしているが、農業だけで自立するまでには至っていない。集落内で収益を挙げられるような産業の創出など、新たな仕組が必要とされる。
- ・今後は空き家を利用した民泊の展開も構想している。

## 事例 No.4 京都北部地域（福知山市毛原地区）

### 1. モデル地域の概況（基礎データ）

範囲	・京都府福知山市（旧大江町）毛原地区	
立地条件	<b>★ 京都・大阪の中心部から離れた中山間地</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・京都市中心部から直線距離で約 75km、北近畿タンゴ鉄道大江山内宮駅まで鉄道で約 2 時間。</li> <li>・大阪市中心部から直線距離で約 90km、北近畿丹後鉄道大江山山内宮駅まで鉄道で約 2 時間。</li> </ul>	
自然条件	土地利用・植生	<b>★ 古くから生業の中で育まれてきた棚田の景観が残されている</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・斜面には棚田が形成されており、日本の棚田百選にも選ばれている（詳細は「6）外部評価」を参照）。また、京都府景観資産にもなっている。</li> <li>・棚田を取り囲む斜面は主にスギ・ヒノキ林、コナラ林、アカマツ林、モウソウチク林からなっている。</li> <li>・モウソウチク林の相対優先度は H16 年は 31.6%であったが、H18 年には 33.1%に増加している。</li> <li>・既にほとんどのアカマツは樹勢が弱っており、いずれコナラ林へと置き換わっていくと予想される。</li> <li>・丹後天橋立大江山国定公園の第 2 種特別地域となっており、許可を要する制限行為や禁止行為が規定されている。また、これにより福知山市から補助を受けている。</li> </ul>
	地形・水系	<b>★ 三方を斜面に囲まれた小さな集水域</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・三方を斜面に囲まれた小さな集水域であり、農業用水は斜面からの湧水に頼っている。水源確保の難しさが農業基盤整備を行わなかった理由の一つでもある。</li> <li>・斜面に発達した棚田が水を蓄え、洪水や地すべり等の災害を緩和する役割を担ってきた。</li> </ul>
	特徴的な動植物の生息・生育状況	<b>★ 水辺には里地里山に特有の動植物が生息・生育する</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・里山に典型的な生物が生息し、フクロウ、メダカ、カヤネズミ、トノサマガエル、ヤマカガシといった京都府版レッドデータブック記載種が 8 種生息する。</li> <li>・近年では、かつてほどではないものの、ゲンジボタルが増加している。</li> <li>・斜面林の低木層にはミツバツツジが自生している。</li> </ul>
社会条件	歴史	<b>★ かつては現在よりも広範囲に棚田が広がっていた</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・もともと小さな集落であったが、先祖代々から斜面に水田が造成され、最も人数が多かった時には、斜面の稜線近くまで棚田が広がっていた。</li> <li>・人口が減り始めると、管理者がいなくなって水田は徐々に森林へ置き換わっていった。</li> </ul>
	人口	<b>★ そもそも小さな集落であったが現在はさらに人口が減少</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・棚田が集水域の稜線近くまであった頃は最大 26 戸ほどが住んでいたが、それから人口は減少し、現在は 13 戸である。</li> <li>・ほとんどが高齢者であり、担い手不足が深刻な状況となっている。</li> </ul>
	産業（特に農林業）	<b>★ 農林業が衰退し担い手の高齢化が進んでいる</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・集落の 13 戸のうち、3 戸が兼業農家で、他は兼業していたが定年退職し、現在は細々と農業を営んでいる状況である。</li> <li>・農地面積は全体で 8h である。</li> <li>・農業者の高齢化が著しい。</li> </ul>



図 毛原地区の位置

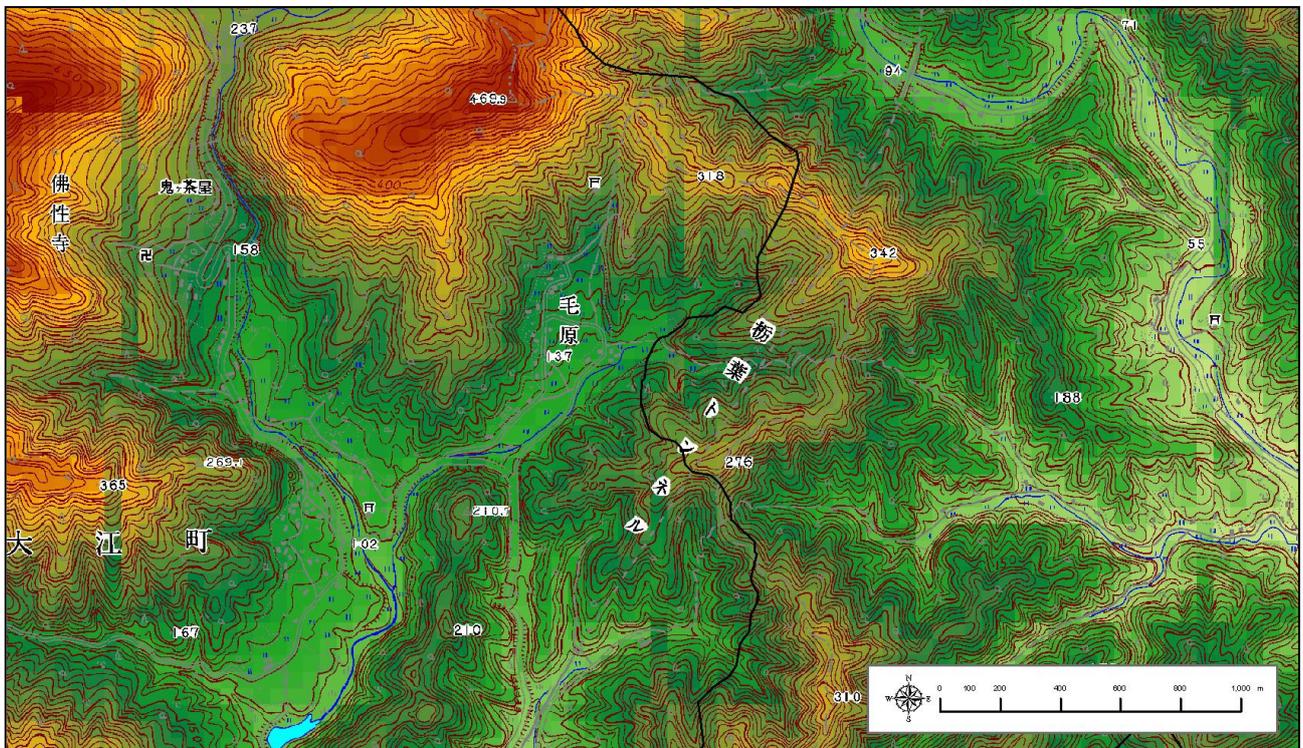


図 毛原地区の地形の概要

## 2. かつての里地里山の姿

---

### ★ かつては古い街道の途中に位置していた

- ・今昔物語、沙石集や小式部内侍の詩に、毛原の付近にある下普甲道（宮津街道）跡を舞台とした話が複数あるため、かつての毛原は由良川付近（河守）から宮津へ向かう街道の途中に位置していたと推測される。
- ・毛原集落の最奥には氏神である大岩神社があるが、大岩神社の横手からは宮津へ向かう街道が伸びていた。現在も石畳の道が一部残されている。
- ・付近の大江山には数々の伝説が伝えられており、日子坐王の土蜘蛛退治や、聖徳太子の弟である麻呂子親王の鬼退治など、大江山周辺には多数の伝説が伝えられている。
- ・中でも源頼光の酒呑童子（しゅてんどうじ）退治伝説は有名で、毛原周辺にも「鬼の岩屋」「頼光の腰掛掛け岩」「酒呑童子屋敷跡」など、伝説を留める遺跡が現在も多数残されている。

### ★ 大江山周辺地域での伝統的な産業

- ・大江山周辺では、共同作業が可能である共有林において、樹林を伐採して焼畑を行っていた。この地域の伝統産業である和紙の原料であるコウゾやミツマタは、焼畑後の農地で地力を回復させるための輪作作物として栽培されていた。
- ・主な山仕事として割木づくりや炭焼きが行われていた。また、柴は水田の材料に使ったり、適当な太さの木は稲架用にも使われた。
- ・農業の副業として炭焼き、養蚕、和紙、和ロウソクなど森林資源を利用した地場産業を発達させてきたが、伝統産業はほとんど姿を消してしまった。
- ・戦後の毛原周辺では古くからタタラ製鉄が行われていた。毛原では良質の砂鉄が大量に産出し、また、砂鉄を溶解するために必要な木炭の大量製造も可能であった。当地に伝わる鬼の伝説の正体はタタラ師であるという説もある。

### ★ 農家一人一人が手をかけて営んできた棚田における稲作

- ・先祖代々の居住者が山を切り開いて田んぼを作り、周辺の山・川とともに守ってきた。急斜面の厳しい立地の中で、機械のない時代から、それぞれの農家が一枚ずつの田んぼに手を入れて米を作り、育ててきた。現在は約 600 枚の田んぼが残っているが、一枚ごとに代々の所有者が手入れをしてきた苦勞の歴史が集積されており、全体として棚田の景観が残されている。

### 3. 里地里山の現状（問題点）

---

#### ★ 担い手の減少と遊休水田の増加・棚田を含めた里山景観の荒廃

- ・毛原地区では三方を斜面に囲まれた谷の中で棚田を造成し、水田稲作を営んできた。多い時には斜面の稜線近くにまで棚田が広がっていた。現在は放棄された棚田が森林に遷移するなど、棚田の規模は減少している。
- ・多いときで 26 戸と、もともと小規模な集落であったが、現在ではその半分の 13 戸まで減少し、遊休農地も増加傾向にある。
- ・タタラ場があった頃の毛原では木炭が大量に製造されていたが、現在では木材の需要がなくなり、森林も管理されなくなった。農地にすら管理が行き届かない状態であり、森林管理はさらに困難な状態となっている。

## 4. モデル地域における里地里山の保全・活用の取組

### 1) 取組の実施主体・体制

毛原地区の住民、行政（合併前：大江町、合併後（H18～）：福知山市）、田舎暮らし応援団、大江で地酒を造る会から構成される棚田農業体験ツアー実行委員会が取り組みの主体となっている。

毛原地区の里山は住民が管理しているが、明らかな人員不足であり、主に都市住民を対象として、活動への参加を働きかけている。

京都府ではモデルフォレストによる企業参加の取り組みが実施されており、毛原においても2企業が主に森林整備に参加している。

#### 《里地里山の管理を促進・支援するための活動のポイント》

##### ★ 都市住民の理解を得る

- ・毛原地区では絶対的な人員不足が課題であり、里山を維持していくためには都市住民等、外部からの人手の確保が必要である。
- ・棚田農業体験ツアーを中心とした活動により、都市からの参加者を募り、毛原地区の住民と交流することで、毛原地区の良さ、棚田の良さを理解してもらう。

##### ★ 新規就農・定住へのハードルを下げる

- ・特に棚田に興味を持った人は棚田オーナーになることができる。
- ・オーナーは地元農家から棚田での農業の指導を受けることができるため、農業の経験がなくても参加できる。また、大型農機を地元農家から借りることができる。
- ・農業の経験がなく、大型農機の準備も必要ないということで、都市住民の農業への参加のハードルを下げています。

##### ★ モデルフォレスト制度による企業参加

- ・農地以上に管理の手が行き届かない森林の管理を企業の力を借りて実施。
- ・企業は社会貢献活動のアピールや京都府の森林吸収量認証制度の認証を受けることができる。



毛原の棚田景観

## 2) 取組の経緯

- ・平成 2 年度 ふるさと創生事業により地域個性を活かした事業の動きがはじまる  
今後、田んぼと畑を如何に守っていくか、集落で話し合いを行った
- ・平成 9 年度～ 棚田農業体験ツアーの開始
- ・平成 10 年度～ 棚田オーナー制度の開始
- ・平成 13 年度 グラウンドワーク事業（地域資源の探索、ワークショップ、活性化計画策定、ビ  
オトープ池造り、将来計画マップ作成等）
- ・平成 19 年度 モデルフォレストによる協定を締結  
丹後天橋立大江山国定公園の区域内となる（第 2 種特別地域）

## 3) 取組の目的・目標

毛原地区の活動は、里山保全・活用に関して、下記のような目的・目標を置いている。

### ＜目的＞古くからの生業によって生み出された棚田景観の保全

- ・毛原地区では伝統的な里地里山の技術や祭りなどはほとんどが失われてしまっているが、その中  
でも棚田景観だけはなんとか維持してきた。
- ・各農家が愛着を持って、手をかけて育ててきた田んぼを保全することを目標としている。

### ＜目標＞毛原地区に定住し、水田を守っていく担い手を呼び込み、棚田の景観を保全すること

- ・棚田の維持には多大な労力がかかるが、人員が少なく、高齢化も進んでいる毛原地区の力だけで  
は困難である。そのため、都市住民等を対象に、まず毛原の棚田の良さを分かってもらい、ことか  
ら始め、最終的に棚田を守る担い手となってもらい、自立した集落として棚田の景観を保全して  
いくことを目標としている。

## 4) 取組の主な内容

毛原地区では、地元住民が中心となって活動の企画等を行い、福知山市が主に広報の役割を担っている。また、田舎暮らし応援団と大江で地酒をつくる会もそれぞれの得意分野を活かした活動の企画を行っている。以下に取り組みの概要を示す。

## ① 棚田農業体験ツアー

【場所】毛原地区の棚田

【参加費】当日参加：1,500 円

年会費：30,000 円/1 口（家族やグループ単位で 1 口）

【内容】年 3 回実施されている（田植え、稲刈り、秋の運動会）、主に都市部から参加者を募り、棚田での農業を体験してもらう。農業以外にも「木の実名前当てクイズ」「地域探索」「どろんこバレー」「餅つき」などのイベントも開催している。

【ねらい・ポイント等】

- ・毛原地区の棚田を守っていくためには、集落内だけでは明らかに人手不足であり、また高齢化も進んでいるため、都市部などから人を呼び込む必要がある。
- ・しかし、最初から定住者を探すということは非常に困難である。まず、都市部の人たちに毛原の棚田の良さを分かってもらうため、年間数回の体験ツアーを行っている。また、地元の人との交流会も行われ、食事やお酒も振舞われる。
- ・かつての毛原はあまり余所者を受入れるような気質ではなかったが、今では外からの人を歓迎するように変わってきた。
- ・福知山市からの 10 万円の補助と、参加費だけで運営しており、なんとか経費は回収できているという状況で、収益は上げられていない。
- ・ツアーの参加には当日参加と年間参加の 2 タイプがある。
- ・当日参加では交流会の参加費として 1,500 円を徴収している。
- ・年間参加は、年会費として 3 万円を徴収し、毛原で出来たお米、地酒、野菜、近隣宿泊施設の割引券など、概ね 2 万円分のプレゼントが用意されている。地元の農産物がメインであるため、年間参加が増えれば、地元の農業需要も高まるという仕組みになっている。

## ② 棚田オーナー制度

【場所】毛原地区の棚田

【参加費】年間 50,000 円/1 組

【概要】人手不足等により管理が行き届かなくなった農地について、年からオーナーを募集する。オーナーは年間 20 回ほど作業を行う。作業の指導は地元農家が行う。また、大型農機は地元農家が貸し出している。収穫される米は全てオーナーの所有になる。現在は 4 組のオーナーが約 35a の水田で作業を行っている。

【ねらい・ポイント等】

- ・オーナーは都会ではできない経験ができる上、美味だと言われる毛原の棚田米（約 200kg）を得ることができる。
- ・地元農家は農業の指導等が必要になるが、作業はオーナーが行うため、少ない負担で水田を存続させ、棚田景観の維持にも貢献することになる。
- ・都市の住民が最初から大型農機を揃えることは困難であるが、この制度では地元の農家から大型農機を借りることができるため、都市住民でも農業に参加しやすい。
- ・長期間オーナー制度に参加し、棚田での農業技術が身につけば、毛原への定住へ発展することも考えられる。実際に、10 年ほどオーナー制度に参加し、定住に至った世帯がこれまでに 2 組存



棚田オーナー紹介の看板

在する（1組は病気のため再び都市部へ移住）。

- ・ 棚田農業体験ツアーで興味をもってもらい、棚田オーナー制度によって実際の農業技術を受け継ぎ、最終的には毛原に定住し、担い手になってもらうことを目標としている。
- ・ 担い手が増えれば、行政の支援等がなくても、毛原の集落として自立して棚田景観を保全していくことができる。

### ③ログハウスづくり講習会

【場所】 毛原地区の伐採地

【参加費】 年会費 3000 円/1 組、費用 75,000 円/1 組

【概要】

- ・ 実行委員会を形成する団体の一つである「田舎暮らし応援団」が主体となって実施。
- ・ 毛原地区にはかつて田んぼだったが、現在は森林になっている場所が多くある。そのような場所で伐採した木材を利用し、ログハウスを作る（平成 18 年度に開始し、平成 20 年度に完成）。

【ねらい・ポイント等】

- ・ 完成したログハウスは新規定住者が開園する摘み取りブルーベリー農園の休憩場所など、活動の拠点となる。
- ・ 放置され森林になってしまった水田を、伐採した木材とともに有効利用することができる。
- ・ 将来的には希望者に地区の土地を斡旋してログハウスづくりを推進し、新規定住者の増加に繋げることが検討されている。



完成したログハウス

### ④モデルフォレストによる企業参加

【場所】 毛原地区の里山林

【概要】

- ・ (社)モデルフォレスト協会の斡旋により、福知山市内に工業団地を有する 2 企業（・パナソニック フォト・ライティング(株)、エスペック(株)）と毛原自治会が協定を締結。活動の意思がある企業に対し、地元住民が活動の場を提供する形式となっている。
- ・ パナソニック フォト・ライティング(株) は月に 1 回、エスペック(株) は年に 2 回、毛原に訪れ、間伐やホダ木づくりなどの森林管理を行っている。



企業による森林管理の拠点

- ・ 主な管理地である北側の斜面の低木層にはミツバツツジが多数自生しているのが確認されているが、放置され暗くなった森林の中で目立たない存在になっている。間伐などにより「つつじの森」

の再生を目指す。

#### 【ねらい・ポイント等】

- ・ 棚田以上に管理が行き届かない森林の管理を企業の協力を得て行うことができる。
- ・ 企業は社会貢献活動をアピールすることができる。また、京都府では企業に対して事業者排出量削減報告書の提出を義務付けているが、モデルフォレスト運動により活動した面積に応じて CO<sub>2</sub> の森林吸収量の認証申請ができる（現在認証を受けているのは合計 5 企業）。
- ・ 「つつじの森」は、目に見える森林管理の効果としてアピールすることができる。

### ⑤企業誘致

#### 【概要】

- ・ 平成 8 年に福知山市の起業者から「イタリアンレストラン・結婚式場を建設したいが良い場所がないか」との紹介があり、これを受けて休耕田、後背地の活用ができ集落が活性化するのなら、ということを受入を決定した。平成 9 年 10 月にレストラン・結婚式場「OZ」がオープンし、地元と企業が協力関係を築いている。



レストラン・結婚式場「OZ」

## 5) 進捗管理及び成果

### ★ 担い手確保と活動基盤の充実

- ・ 棚田農業体験ツアーによって棚田の魅力を知り、棚田オーナー制度にて長期間かけて棚田での農業技術を身につけ、最終的に定住に至った世帯が既に 2 組誕生している（1 組は病気のため再び都市部へ移住）。
- ・ かつての毛原は「余所者」を受入れるような気質ではなかったが、都市住民との交流を重ねるにつれ、「余所者」を受入れるようになってきた。
- ・ 活動の拠点となる、地場産木材を利用したログハウスが完成した。
- ・ 2008 年 1 月には「毛原の棚田」が京都府景観資産となった（詳細は「6）外部評価」を参照）。

## 6) 外部評価

### ★ 棚田特有の景観をはじめとした多面的機能への評価

- ・ 平成 11 年度には、自然流下による天水を貴重な灌漑用水として活用した昔ながらの営農や、災害防止機能、景観等が評価され「日本の棚田百選（農林水産省・農村環境整備センター）」に選定された。
- ・ 平成 19 年度に丹後天橋立大江山国定公園が新規国定公園として誕生し、毛原地区は公園区域内の第 2 種特別地域となった。公園指定書には、「山麓域には棚田を有する里地里山が広がっている」ことが国定公園の指定理由の一つとして記載されている。

### ★ 棚田の景観とそれを守る活動への評価

- ・ 京都府には景観資産登録制度があり、その目的は、「地域ぐるみで守り育てられている魅力ある景観を、その景観を支えている地域の活動を合わせて評価し、広く情報発信し、その価値を共有す

ることで、府内各地の景観づくり活動を育てていくこと」とされている。毛原自治会は京都府景観指定登録への提案書及び保存計画書を作成し、京都府景観審議会にて審議された後、平成 20 年 1 月に「毛原の棚田」が京都府景観資産に登録された。さらに、同年 3 月には京都府選定文化的景観の第 1 号となった。

## 5. 今後の課題

---

これまでの毛原地区の取り組みから、今後の課題として下記の 4 つが想定される。

### ★新規定住者の受入体制〈担い手確保・技術継承の側面から〉

- ・もともと小さな集落であるため、定住希望者が現れても借りられる空き家がなく、また、高齢化と減反政策により棚田を維持するための耕作ができない。
- ・地元が高齢化・過疎化しているため、受入能力にも限界がある。
- ・今後は農業体験を通して帰農者、新規就農者の育成を続け、棚田オーナー、定住、半定住者を確保することで集落・棚田の保全取り組みの経験を維持していく。

### ★里地里山全体としての総合的な取組に向けた多分野連携〈活動の組織体制の側面から〉

- ・棚田農業体験ツアー実行委員会にて様々な活動の企画は持ち上がっているが、人員・資金が足りず、なかなか実現できない。現状の活動を継続するのが精一杯の状態である。

### ★里山における「生業」の復活に向けた取組〈活動資金の側面から〉

- ・現在は福知山市からの年間 10 万円の助成と、参加者の会費のみで活動を続けており、収益は得られていない。
- ・棚田は農業生産の場としては不利であるが、米の食味は優れていると言われているため、棚田米としてのブランド化等により収益を上げる取組みを考案する必要がある。